

Reversal ! 貞操逆転世界の男子学生

豆板醬山盛り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡な高校生、新山 良

朝、彼はそれまで生きてきた世界とは似て非なる世界に自分がいることに気づく。

女が男らしく、男が女らしい、貞操観念が逆転した世界。

男が少ない世界に突然迷い込んでしまったのだ。

彼はあべこべな世界で、どのような日常を送るのか…

※以前こちらで連載しておりましたが、私の不足にて取りやめ、内容等を一新し新しく書き始めた作品となります、前作品には原作として天原帝国さんの貞操逆転世界を載せさせて頂いておりましたが、今作は異なる世界観の別なものとして自分の貞操逆転物として執筆しております。何卒ご容赦下さいますよう、お願い申し上げます。

目次

Re:01	逆転世界のはじまり	1
Re:02	影に咲く向日葵	11
Re:03	誤解と邂逅	21
Re:04	天然系ビッチくん	33
Re:05	シヨタからロリへ	47
Re:06	そこに男女は関係ない	57
Re:07	譲れない真理、変わらない想い	64
Re:08	向日葵と太陽と	71
Re:09	日の当たる場所へ	80
Re:10	写生大会、日本語は難しい	88
Re:11	伏兵	96
Re:12	想いに応えるということ	102
Re:12.5	友と過ごす放課後	109
Re:13	変化	115
Re:14	友であるが故に	121
Re:15	騒動の始まりはいつも突然で	127

Re:01 逆転世界のはじまり

世界がおかしなことになっている。

それに気づいたのは朝食時のこと、BGM代わりに点けていたテレビから聞こえて来たニュースがきっかけだった。

「昨夜、一人暮らしの男性宅に侵入、暴行を加えようとしたとして三十代の女が、住居不法侵入及び紳士暴行未遂容疑で逮捕されました。女は住居不定、無職の——」

「今話題の男性アイドルグループ赤禪48、なんと今年の夏にドーム公演が決定しました。この件についてグループリーダーの岩崎巖さんは以下のように——」

「賛成多数により、ついに我が国において初の男性の総理大臣が誕生することとなりました。総理は20××年に初当選、その後は地元活性化にご尽力され——」

チャンネルを変え、どの番組を見ても違和感しか無い。

本来男が担っていた役割を女性が担い、なんだか番組出演者の比率も女性が多い。

朝食のパンを喰えながらポストから新聞を抜き出し、バツと開いて確認すると眩暈がしそうな文字が並ぶ。

男性活躍活性化社会、男性保護法案、一夫多妻制度、:etc

なんのジョークかとも思ったが、どうやら今、俺がいる世界は本格的におかしい状態らしい。

男性が養われ、女性が生活を支える屋台骨、そんなアベコベな世界になってしまっていた。

俺の名前は新山 良、17歳、身長170cm、体重64kgの中肉中背、容姿は普通、偏差値は平均値、どこにでもいるごく普通の男子高校生だ。

否、ごく普通の男子高校生、だった。

どうやらこの世界においては俺のような男子高校生というのは、希少な存在であるらしい。

俺のような、というよりも男子高校生、通称DKは全国的にも人数が少ない、非常に希少であるとのことらしい。

DKってなんだよ、ドンオーコグかよ。

昨日までと同じように通学バスに乗り込んだのだが、今までの世界とは違うと思わされる事があった。

朝の通学の時間は、社会人の方々の通勤時間とも重なる故、車内は非常に混みあうのは皆さまでもご想像に容易いだろう。

今朝も普段どおり、いやもしかしたら普段以上に混んでいたバス車内、しかしその光景は俺の予想したものとは明らかに異なるものだった。

男が、いない。

辺りを見回しても、車内から外を覗き見ても、そこには女、女、女、である。

気だるそうに新聞を読むおっさんはおばさんに、やかましい音楽をイヤホンから漏れ流す女子は男子に、エロ話で盛り上がる男子中学生は女子中学生へと変わっている。

車内に漂う香りは鼻孔擦る雌特有の物で、そして全方位から感じるのは舐めまわされているかのような視線、時折臀部触れる感触は偶然であると思いたい。

こんなエロ漫画のような状況の中で感じたのは、悦びでは無い、恐怖である。

獣の檻の中に突如として放り込まれたような、無数の狂気の眼に常時睨みつけられているような感覚に冷や汗は止まらず、生きた心地がしない。

結局は無事(?)に学園前の停車場へと到着出来たものの、二度と通学でバスは使うまいと心に決めたのであった。

「肉食系女子って言うにしても程度ってもんがあるだろうよ…。俺はインパラじゃねえぞ。」

ありや肉食系っていうより狩猟系って感じの眼光だった、うん。

雌ライオンそのものって感じだったわ。

「つつーか、ほんとうに女子だらけだな…。」

道行く生徒、学園の門を通る全てが女子生徒、え、なに、まさかそんなこの学校って女子高だったっけ？

呆然としている俺の背中に軽い衝撃、後ろを振り返れば見覚えのある人物が立っていた。

「彰人！お前っ！無事だったのか！」

「よっす良、ってか何だよおい、無事だったとか朝からどうした？」

葛城 彰人、幼稚園の頃からの付き合いで唯一無二の俺の親友、180を超える高身長にガタイの良い体格、活発そうな印象を残す笑顔が人を惹きつける。

老若男女に好かれる人誑し、んでもって頭も良い、異世界に飛ばされそうなチート野郎だ。

こいつと幼馴染な俺は何度神を呪ったか数えきれない、だが性格が良い故に憎みきれないのだ。

「どうした？溜息なんて吐いて？」

「や、なんでもねえよ。」

「そか、つつーかお前！ボタン、ちゃんと留めろよな。胸元見えてるじゃねえか。」

「はあ？これくらい普通だろう？何言ってるんのお前？」

「そりゃこっちの台詞だ馬鹿、おまえなあそんな恰好で出歩くなんざ、襲ってくださいって言ってるようなもんだぞ？」

「はあ？」

「良いから、ほら！見ろ！」

彰人が指差す先では、女子が俺を見ながら何やらざわざわと盛り上がっている。

：なるほど理解した、バスでのあの視線は、珍しい若い男＋セクシーサービスしとるって意味でガラガラしていらっしやってたんですね。

確かに女子高生が無防備な薄着で、尚且胸元おっぴろげてバス乗ってたら、俺でも見ちゃうわ、狩猟本能解禁しちゃうわ。

「わり、今度から気をつけるわ。」

「是非そうしてくれ、周りの為にもな。」

そんなこんなで教室に向かう俺達、すれ違う度に女生徒たちは振り返り、目が合えば頬を染めて視線を外す。

お、なんだこれ、なによもしかして俺ってばモテ期来ちやったり

するの？ 案外、こっちの世界も悪くないんじゃないやね？

いやあ、まいっっちゃうねおい、こんなハーレムな状況で？ 学校生活送れちゃうとか、夢のようだよ！ 我が世の春が来ちゃったよ!!

まあ…、今朝のバスみたいな状況はご勘弁頂きたいけれども。

「…良。」

「おう。」

肩を叩く親友、バカでかい溜息をひとつ付くと俺の腰元を指差す。

「腰パンもやめようぜ。トランクス、見えてるぞ。」

「…はい。以後気を付けます。」

どうやらモテた訳ではないらしい。

普段ならそうでもないが、今日はなんだか凄く恥ずかしくなって、俺は無言で制服のズボンを整え直した。

女子たちの大きな溜息が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

きっと気のせいだと思っておく。

「状況的にはおいしいのかもしれないけど、やっぱ、やりずれえよなあ…。」

授業を終えた休み時間、窓の外に広がる青空を見つめながらボヤク。

今朝のバスの一件もそうだし、自分の身なりに関してもそうだ。

むこう（昨日までの日常）じゃ、特に気にもしなかった常識が通用しない、それどころか自身を危険に晒す可能性すらある。

こりやあ相当に気を張らんと暫くは慣れそうにない、注意確認しつかりとしなければ。

「よ、新山！なあに黄昏ちやってんの？何よ何よ、まさか男の子の口つてやつ？」

「どんな日だよそれ。つていうか机の上に座んなよ吉沢、パンツ見えんぞ。つつかちよつと見えてんだよ、隠せ。」

俺の机に腰を掛けてきたのは、吉沢 まどか、襟元まで伸びた黒髪に整った顔立ち、そして自己主張激しいボディラインはむこうでは男の目を釘付けにしていた。

その上、誰にでも明るく人当たりのよい性格で、常に周囲には誰かがいるという人気者だった。

…おっぱいは正義、はつきりわかんかね。

ちなみに今日の下着は灰色っぽい地味目なやつのような。君には色気つてもんがないのかね。

「え、ああ、別に良くない？パンツくらい。」

「良くねえんだよ、畜生…。」

「変な新山？あ、そうそうパンツと言えばあんた！今日めっちゃパンツ見せながら登校してきたんだって？女子の間で噂になってるよん？」

パンツ…？ああ今朝の腰パンの一件か…。やっぱりそうなるのね。まいったなこれじゃまるでただの変態じゃねえか俺。

…。
パンツ見せながら登校する男、こつちの世界に置き換えれば女か

それなんのエロゲ？

「つか、どんなパンツ穿いてるわけ？めっちゃ気になんだけど。」

「どんなって、黒のトランクスだよ、普通のな。」

あ、やべ。

ボケっとしてたもんで、つい反射的に答えちゃった！

と焦っても時既に遅し。

「く、黒だつて！黒つ！黒のトランクス！ひゃー！」

「え、マジ？あたし、新山は白のブリーフであつてほしかったなあ…。」
「出たよ童貞厨、つつーかー黒トラとか何、新山つてば案外…エロエロなん？」

「ち、ちよつとやめようよ。そういうのつて良くないよ？お、男の子、し、下着の話、なんてつ、しよ、しよんな。」

「委員長、鼻血出てるつて。ダバダバ出てるつて。」

「はい、トントンしましよーねー。」
「ふみゆう。」

「…あたし、ちよつと、トイレ。」

「あいつ、抜く気じゃね？まじウケんだけど！ガツコで抜くとか！ありえないっしょー！」

「ちげーし！ふつうにおしっこしたくなっただけだし！抜くとか、そういうんじゃねえし！マジ漏れそうなだけだし！」

「スクールオナニストめ！」

「やめて！変なあだ名つけないで！」

やはりというか何というか、女子たちは盛り上がっていた。

というか女の子がふつうにおしっこなんて言うものじゃありません。お花を摘みに、とかこう色々あるんじゃないのかな？

それに、オ、オナ、い、いかん、いかんど俺、素数を数えろ。落ちて着け落ち着くんだけ小さな自分、まだ起きる時間じゃない。

ああ…やっぱやりずれえよ…。

「あんたさあ、聞いたあたしが言うのもなんだけど、ふつう正直に言うかね?。」

「ああ、俺もやっちゃまったと思ってるよ。」

「気を付けなよ? あんたってば、気さくに話しかけてくれるってんで、女子の間じゃ結構人気あるんだから。」

「なんだよそれ、どうせなら超絶イケメンで恰好良い! みたいな理由が欲しかったぜ。」

「あのねえ、女は顔の良い男よりも、笑顔が可愛い男のほうにトキめいちやうもんなんだよ?。」

「そういうもんなのかねえ。」

まあ、確かに愛嬌全くなしのすました美人よりも、良く笑う明るい普通の女の子なら後者の方が男からの人気は高い気がする。

案外、こつちの世界の女性も、向こうであったみたいな女性らしい感覚つてのものもあるのかもしれない。

「まあチ○コがデカけりゃより良いけどね。」

「結局そつちなのかよ! ちよつと関心しかけた俺に謝れこらっ!。」

女の子がチン○とかふつうに言うんじやありません!

Re:02 影に咲く向日葵

あっ！

という間に時間は過ぎる。今は放課後、夕暮れ空。

普段ならばエリート帰宅部である俺は自宅直帰、今夜の夕飯の買い出しへ向かうところなのだ…。

今日はひとり、校舎内を歩き回っていた。

突然、おかしな世界に来てしまったが故に、少しでもはやく慣れなくては、この先やっていけないと思ったのだ。

出来るだけ、この世界側の住人の日常を観察すべく、先ずは同じ学校の男子生徒から…とってはみたものの。

「まさか男子がここまで少ないとは思わなんだ。いくらなんでも少なすぎないかい？」

パツと見て各クラスに3名いれば多い方、クラスの平均生徒数は35から40であるから、非常に少ないといえる。

うちの学校は特殊な専門学科が主体の高校ってわけでもない、ごくふつうの偏差値のごく普通な公立高校だ、それでこれである。

うちの学校でこの男女比率ということは、もっと広い規模で見ても

世界的に男女比率はおかしなことになっているんじゃないか？

どうなつとんねんこの世界の染色体は、しっかりしようよY染色体の諸君。

「しかも男子生徒の殆どが文化部所属で、運動部にいる奴はゼロと来たもんだ。」

男子生徒達が集まって、お料理やらお裁縫やらでキャツキヤしてる光景は、今も忘れられない。

乙女チツクが過ぎるだろ！クッキー焼いてる場合じゃねえぞ！

日本男児が乙女淑女と化してますよ！大和魂はどこにいったんだよ！それでもキ〇タマ付いてんのかよ！クッキーは美味かったよちくしょう！

…なんだか、な、涙が、出ますよ…。

一方で女生徒たちは遅しい、っていうかだな…。

「じゃあ！次、ショートツ！行くよ！」

「しっ！来いおらあつ！」

「キャツチ遅い！そんなんじゃないや内安打にされちゃうよ！もつと身体から突っ込んで！」

「うおっす！もう一球ショーバンお願いしまっす！」

「クロス上げんのもう少しこう、タイミング合わせて欲しいな。」

「こう、かな？射し気味に上げた方が良い？」

「いやもつと引きつける感じで…。そのほうがボレーに行きやすいし…。」

「みんな行くよ！隊列意識して！」

「二パンツアーフオー！」

「ふえへへやっぱりシヨタは最高ですなあ。」

「半袖半ズボン正義だよねえ。」

こう、部活動ひとつ見ても凄く何と言いますか。

活発的である、いや、もとの世界にもそういう娘はいたけど、それにしても、である。

一部おかしな奴らもいたけれど、半ズボン研究会ってなんだよ。

なんですか、貴女がた本当に大和撫子ですか!?どうしたらそんなに光り輝く汗が似合うようになるんですか!?その爽やかな表情は何なんでしょうか!?

ふつうに羨ましいレベルなんですけど、女子にモテそうなんですけど。

まあみんな女子なんですけどね、しかもみんながみんな整った顔立ちをしているという。

美人と可愛い子しかおらんぞこの高校、前の世界じゃブスの方が多かったやんけ！ソルジャーみたいな肩幅の女子とかどこ行つたんじゃない！

…男子はどうなんだって？

聞くなよ、泣きたくなるから、俺どうしてこの世界に来ちゃつたんだろう。

なんで生きてるんだろう、主人公なのにモブ顔でごめんなさい。

ほんまにこの世界はどうなつとんじや！モブ顔にも人権を！肖像権を下さい！

「はあ…。」

あん？

自分の声と重なるように響いてきた溜息に、思わず目を向ければそこには空き教室の扉が。

「…吉沢？」

溜息の正体が気になった俺は、扉の隙間から教室の中を覗いた。

そこには知った顔の人物が頬杖をつき、物憂げな表情で夕空を見つめている。

あいつ確か、前の世界じゃ陸上部だったよな？陸上部は今もグラウンドで練習している。

なんでこんなところにいるんだ？部活さぼったんかな？っていうか部活自体入ってないとか？

いや、それにしても社交的なあいつが一人でいること自体が以外だ、放課後は友達とカラオケとか喫茶店とか、そういうイメージだったからな。

一体なにが…。

ガツツ

「えっ!？」

「へあ、っ!？」

つま先が扉に当たってしまい、響いた音に、吉沢の顔がこちらに向く。

間抜けな表情の俺を嘲笑うように扉は滑り開いてゆく、おうやめーや、口開きっぱな顔を思いっきり見られたじゃねえかよ。

「新山…うな、なにさどうしたん？こんなところに、用事？」

「あ、いや、なんつーか。」

「なに慌ててんのさ、へんなやつ。」

「わ、笑うなよ。…その、覗いてたのは悪かったと思ってる。すまん。」
「良いよ、謝んなくても。あたしがボツチなことなんて、みんな知ってることだし。」

ボツチ…？いや、ちよつと待て！

え、だってこいつは吉沢まどかだぞ！

男女皆から慕われる人気者で、いつも女子たちに囲まれる人格者で、バレンタインじゃ、こいつのチョコ欲しさに戦争になる位にモテてた吉沢だぞ!？

そんな吉沢が、ボツチ？

いやいやいや！ありえねえだろ、天地が翻つてもありえねえだろ！

いや世界がちよっとおかしく翻っちゃってるけどさー！

「ほんとにどうしたん？今日のアンタ、なんかおかしいよ？」

「いや、別に、何も！っていうか、一個だけ、聞いても良いか？」

「うん？なあに？」

「吉沢って、部活とか入ってなかったっけなーと思って。」

「入ってるよー、陸上部。」

「ならどうして？」

どうしてこんな人気のない場所で、あんな顔してたんだ？

「なんていうのかな、コレが色々邪魔でさ。」

「これって…！ばっかおまえ！俺は真面目にだな！」

「真面目も大真面目だよ、大きいってのは色々損なんだよ新山？男子にはモテないし、部活じゃ競技に向いてないから雑用ばかり。嫌になっちゃうよね。」

「は、ええ、モテないって嘘だろお前っ。」

「いやいや、なんでそんなびっくりしてるのさ、世の中は貧乳が正義だって、あんたも男なら知ってるっしょ。巨乳はキモイだけで何の得にもならないってさ。」

そんなことあってたまるか…いや、待て。

この世界は、いわば何もかもがアベコベな世界だ。

男は女らしく、女は男らしい。

極端に偏った男女の比率に、やけに整い過ぎている周囲の容姿。

貞操観念が逆転しているという部分を見れば、男女の魅力においても【逆転現象】や【差別的な何か】が起こっていても何の不思議も無いのではないか？

つまり、吉沢のように多数支持派であつた綺麗な形の巨乳はモテなくて、一般的に少数支持派と見られていた貧乳の女子がモテる。

整った容姿の人間が多いのも【それが一般的な容姿だから】でも、もしかしたら向こうでの美形がブサイクで、向こうでのブサイクが美形ってことか？

だから、俺のような平均線上下真ん中に立っているような男がいなかった。

極端な世界、極端な価値観、倫理観。

つまり吉沢がボツチっていうのも…。

「…吉沢。」

「なに？」

「俺は巨乳が好きだ！とくに、おまえのような綺麗な形のおっぱいには！目が無い！」

「ぶっ！いやいやいやいきなりどうしたのさ!?わけわかんないんだけど！き、き、巨乳が、好きとか…。」

「そう思っただからしようがねえだろ、ぶっちやけおまえの顔も好きだ！目がパチツツとして！鼻は高いし！唇も色っぽい！」
「いや、ちよ、か、からかうなって！あたしみたいなブサイクにそんなこと言っても」

「吉沢まどかは、誰がなんと言おうと美人で可愛いんだよ！」
「あう」

あわあわと俺の言葉を否定し続ける吉沢を、真っすぐに見つめて大きく息を吸い込む。

こいつがなんで、あんな表情をしなくちやいけない？

こいつには笑顔が似合う、悪戯っ子みたいな人懐っこい笑顔が似合う、こいつの笑顔は周囲を明るくするんだ。

俺にとって吉沢まどかは、太陽の下、まっすぐに主張するヒマワリのような存在なんだ。

「吉沢に悲しそうな表情なんて似合わない、俺はいつでも楽しそうに笑って、気さくで愛嬌があって…、おまえを見ていると元気が湧いてくるんだ。」

「ちよ、新山あ」

紅潮した頬、潤んだ瞳、上目遣いで見つめるその表情は、やっぱり可愛らしくて美しい。

枯れさせちやいけない、曇らせちやいけないんだ。

「俺は大好きなんだっ！そんな吉沢まどかが！」
「——っ！」

…あつれ？俺ってばナニを口走った？



『俺は大好きなんだっ！そんな吉沢まどかが！』

『——っ！』

びっくりした。

クラスでも人気の高い男の子から、意外な言葉を聞いてしまったから。

新山 良。

笑顔が可愛くて、気が利いて、誰にでも気さくで明るくて、ノリが良い。

新山のまわりにはいつも誰かがいて、彼が笑うと周囲が明るくなる、まるで太陽のような男の子。

バレンタインのときなんて、新山狙いの女子同士でちよつとした争いが起こるくらい、モテる男の子だ。

そんな男の子から…。

『大好きなんだっ！まどかが！』

うひやおおっうう!?だだだ、大好きって！に、新山が、わわわわわ
たわたしの!?

あわわわわわ、あわわわわわ。

ぶしゅう。

そんな音が聞こえた気がした。

頭の中はパニックだ、顔も、いや、全身が熱い。

顔を伏せる、まともに彼の顔を見ることが出来ない、どうしよう、そ
んな言葉が頭を埋め尽くす。

「あ、あの、吉沢？」

心配そうな新山の声、その声を聞いてしまった私は…。

「わ、わたし！いえが！ぶ、ぶかちゆで！と、とにかきゆ！ご、ごめん
なさいっ！」

「あ、おい！吉沢!？」

逃げた。

部活でだってこんなに速く走ったこと無いってくらいに、全力疾走で逃げた。

逃げてしまったのだ、自分を好きだと言ってくれた男の子から。

こんな自分が恥ずかしい、明日から新山にどう接したら良いのかわかんないよっ。

▶

「…やっちゃまったかなあ。」

いや、やっちゃまっただろ。

どう考えても、どこからどう見ても、俺のあの言動は…アレだ。

『俺は大好きなんだっ！そんな吉沢まどかが！』

告白、にしか聞こえねえよな。

なんてこった、吉沢を元気づけるどころか、余計な悩みの種を植え付けちゃった。

「とにかく今は吉沢の誤解を解かなくちや、今から走って…いや、無理だな。もう校門出ようとしてるし、はええなあ…さすが陸上部だ。」

窓から覗けば物凄い勢いで校門を出る吉沢の姿が見えた。

凄えわ、リアルで土煙上げながら走る人類を初めて見た。

「しようがねえ、いったんはLANEで吉沢に一言…あれ？」

連絡先に一覧に吉沢まどかの名前が、無い。

「え、嘘だろ？だって昨日までは…あ」。

そうだよ、昨日と今日は違うんだったよ。

まさかこういう細かい部分にまで違いがあるとは思わなんだ。

つまりはあれか、俺と吉沢は前の世界での友人関係ではなく、ちよつと親しい顔見知り程度の仲ってことか。

そんな女の子に俺は告白まがいのことを…。

「やっべえなあ…。」

明日からどんな顔して吉沢に会えば良いんだよ、俺は。



「はあ…さすがに、この距離を、徒歩は、し、しんどいな…！」

学園を出たのが5時前で、今は…うっわ6時過ぎちゃってるよ。

1時間近く歩きっぱなしってのは流石にしんどいな、空もすっかり暗くなってきた。

いつもはバスに揺られて行き帰りしてたから、そんなふうには感じなかったけど。

俺の家から学園って結構な距離があるんだな。

とはいえ、ようやく家の近くまで来れた、あとは此処のアーケードをショートカットすれば一気にマンションの前まで行けるぞ。

ここって夜は一気に人氣が無くなつて不気味になるんだよな、子供の頃はそんな雰囲気少し苦手だったっけ。

人攫いが出るぞーって爺ちゃんに脅されたっけか？

「ねえねえ、キミ。」

「え？」

昔のことを思い出しながら、薄暗くなったアーケードを進む俺を阻む人影がひとつ。

「あたしら、いまから遊びいこーと思つててさ、よかつたらキミも一緒にどうかなあ？」

「いえ、俺は、ちよつと…。」

うっわ。

派手な銀髪に水色のカラーコンタクト、露出した両肩に刺青、口端には銀のピアス。

いかにもって感じの女の子の人が、俺の前に立ちふさがってきた。

「いいじゃん、いこーよ、たのしいとこ連れてってあげっからさあ。」
「やば、この子イケてんじゃん、：最初、もらって良い？」
「はあ？ぎっけんな、つぎはウチつつたろが。」

いつの間にか後ろにも二人、前に立つ人と同じような髪色のロングツインテの小柄な女の人と、赤髪のロングヘアで顔に刺青の入った女の人が立っている。

囲まれた…？

「あの、俺、急ぎますんで。」

「んなつれないこと言わないでさあ、一緒にいこーよ、ね？」

「イこーうの間違いじゃね？」

「まあ間違っちゃねえけどさあ。」

肩を組まれ、腕を掴まれる。

ゲツ、なんだこの人達、力強っ！

こんな細腕のどこにこんな力が、こっちじゃ女の人の腕力も強く
なってるのか!?

「お、俺、ほんとに、はやく帰らなくちゃいけないんで、すみません。」
「ちっ、そういうのもう良いから、ほら、行こーうって。サキ、リエ、連れてくから、後ろ。」

「はあい。」

「りよーかい。」

「いい加減にしなよ、その子、嫌がつてるだろ？」

「ああん？」

無理矢理に腕を引っ張られた、次の瞬間だった。

俺を掴んでいた女の人の腕を、誰かの声が引き止めた。

目を向ければ、そこ立っていたのは風に流れる金色の金糸、思わず見入ってしまうほどキレイな長髪の女性がゆっくりとこっちに近づいて来ていた。

俺よりも頭一つ分くらい高い身長、腰元まで伸びた金色の髪、透き通るように澄んだ綺麗な蒼色の瞳。

まるで良く出来た人形のような、美しいという言葉以外に例えようのない美女が、目の前にいる。

「なんだてめえ、あたしら、いまこの子と大事な話、してんのよ、部外者はすっこんでろって。」

「大事な話だ？そうは見えなかったがなあ？」

「ねえ、こいつ、ウザくない？…やっちゃおう？」

「…だね。おい、こら、かっこつけてんじゃ」

赤髪の女が金髪の女性の肩を掴んだ瞬間、ふわっと赤髪の女の身体が宙を舞った。

「汚え手で、気安く触るんじやねえよ。」

「こ、このーふえ!?!んぎゃん!!」

続いて殴りかかったツインテールの手首を掴むと、クルリと一回転、そのまま背中から地面に叩きつけられるツインテール。

「すっげえ…。」

合気道っていうのかなアレ、殴るでも蹴るでもない投げるとも違う、払うという表現がしつくりくる早業。

全然力が入ってないように見えるのに軽々と人が倒された。

「ちっ、おい。」

「っ、…ボクシングか。」

うっわ綺麗なワンツー、あれは俺でもわかる、ボクシングの動きだ。

俺の腕を離れた銀髪の女が、トツと一踏みで金髪の女性の眼前まで近づくと左、右と速いコンビネーションを放ったのだ。

たったそれだけの動きだったけど、明らかに素人との動きじやな

い、…この世界の女の人、強すぎませんか？

左を手で払い、右を腕で受けた金髪の女性、銀髪の女が両腕を高く構えると同時に、彼女も両の腕を胸元の高さまで構え、腰を落とした。

「…あれでもダチでね、ダチをかわいがってくれた礼は、受けてもらうよっ。」

「礼なんていらねえっつーの。」

「遠慮すんな、よっ！」

銀髪の女が仕掛けた、左のジャブからステップインして右のアツパーカット、金髪の女性が身体を翻して下からの一撃を避け、そのまま銀髪の眼前まで迫る。

「おとなしく寝てろ。」

「なっ!?!…あんちゃって。」

金髪の女性の掌打が銀髪の女に迫る、今にも銀髪の顎を捉える、その刹那、銀髪の女が肩の位置をクルツと入れ替えた。

スイッチ、右利きの構えから左利きの構えへと切り替えた、掌打は空を打ち、流れた身体に合わせるように銀髪の女の左拳が放たれる。

「寝るのはてめえだ。」

「っ、どう、かなっ！」

「ぐはっ、な、て、てめえ…！」

迫る左拳を無理やり差し入れた左手の甲で受け、そのまま腹部に膝をねじ込んだ。

腹を抑えながら倒れる銀髪の女、それには目もくれず、金髪の女性が俺のもとへと歩み寄ってくる。

「っ。」

一瞬、身構えた俺の横を何事もなかったかのように通り過ぎた。

「あ、あのー！」

「うん？」

思わず、その背中を呼び止めた。

そうだ、このひとは俺を助けてくれたんだ、ちゃんとお礼を言わないと駄目だ。

「助けてくださって、ありがとうございます！」
「ん。」

背中を向けたまま、左手だけをあげ、短く言葉を返す彼女。

俺はその背中に急いで駆け寄ると、彼女の左手を気をつけながら掴んだ。

「おおおう?」

「あの、怪我…。」

彼女の左手の甲は皮が擦り剥け、その箇所からは少量ではあるが出血していた。

「あの、俺の家、来ませんか?近いので。」

「は、はあっ!?!」

俺を助けるために怪我をしてしまったのだから、家まで行けば救急箱もあるし、ちゃんと治療しなくちゃ。

こんなに綺麗な人の身体に、傷跡が残ったりするのは嫌だった。

Re:04 天然系ビツチくん

ぼんやりとテレビを見ながら、スマホを見つめる。

そこには友人からのメッセージ、今日は学校でこんなことがあった、あんなことがあった。

「レイナがいつ戻ってきても良いように、ノートばっちし書いてくからネ！」

「そりやたのもしーな。」

楽しそうに報告してくる、スマホ越しに無邪気に笑う友人の姿を思い浮かべ、笑みが漏れる。

「つと、もうこんな時間かよ。」

気づけば時刻は夕暮れ時を示している。

一日中、家にいると時間が過ぎてゆくのが早い。

夕飯は何にしようか、と思い冷蔵庫を開ける。

「うっわ…。そっか最近買い出し行ってねえからなあ…。」

冷蔵庫の中身は寂しいもので、調味料が僅かにある程度、空っぽと
言って良い状態だった。

「ま、気晴らしに外に出るのも悪くねえか…。」

髪をとかし、かけてあるジャケットを羽織る。

「行ってきます。」

返事なんて返ってこないのに癖で口を出た言葉が虚しく響く、鍵を
締めて自宅を後にした。



近場のスーパーに向かう途中、視界の端に映った光景に足が止まっ

た。

「いいじゃん、いこーよ、たのしいところ連れてってあげっからさあ。」

「やば、この子イケてんじゃん、…最初、もらって良い？」

「はあ？ぎっけんな、つぎはウチつつつたろが。」

柄の悪い奴が三人、一人の男の子に絡んでいる。

「見ちまったからにや放っておけない、か。」

遠目からでも男の子が迷惑そうにしているのが見て取れたし、ああいう連中はそう簡単に引き下がりはない。

男の子一人でどうにか出来る状況ではないのは明らかだった。

本当はおとなしくしてたほうが利口なんだろうけど、ここで見過ごせるほど、あたしは器用な女ではないだ。

「いい加減にしなよ、その子、嫌がってるだろ？」

▶
時計の秒針が動く音が響く。

どうしてこうなった？

あ…ありのまま、今、起きていることを話すぜ！

男の子を助けたと思ったら、いつの間にか、お持ち帰りされちまつた！

な…、何を言っているのか、わからねえと思うが、あたしもなんでこうなったのかわからねえ！

どどど、どうすんだおい！

お、男の子の家なんて入ったことねえぞ!? 親は!? ご両親はいねえのか!?

まさかそんな二人つきりなわけが…

「あ、俺の家、父親も母親も海外で、今は俺一人で暮らしてるんです。だから気を使わずにくつろいじやってください。」

な、なんだってえー！

ご両親は海外い!?今は家にいないい!?つまりは、あ、あたしと、この子の、ふふふ、ふたりつきり…?

「どうかしましたか?」

「い、いや、別につ。」

どうかしましたかじゃねえよ!?どうかしちまいそうなんだよ!?

何なのこの子!?あたしは女だぞ!?

この子には危機感つてもんがねえのか、もつとこうなんだあるじゃねえか、手を繋いでからとかお互いをよく知ってからとかそういうのは!?

「?」

「は、はは…。」

だーめだ、そういうのないわ。

なんなんだよ、そんなハムスターみたいな可愛い目で、純真な目で、あたしを見ないでくれえっ!

「消毒しますね、ちよつと染みるかもしれないですけど…。」

「かまわねえ、ガッツリとやってくれ！」

「は、はあ。わかりました。」

痛っ、こういう痛みも久しぶりだな。

「ご、ごめんなさい。痛かったですよね？」

「いや、平気だよこんくらいは。」

間近で見るとアイツらに絡まれたのも分かるなあ、可愛い顔してるし、小動物みたいな雰囲気だし。

放っておけないというか、なんというか…。

抱きしめたら折れちゃいそうだけど、抱きしめたくなくなっちゃおうというか…。

良い匂いするなあ、男の子ってみんなこうなのかなあ。

「よし、出来ました。」

「お、おう。さんきゅ。」

「お礼を言うのは俺の方ですよ、助けていただいて本当に助かりました。」

「そんな、ああするのは、その、当たり前のことと、べ、別に礼を言われるようなことじゃ。」

「それでもです、こうして怪我までして、護ってもらって…俺、男なのに…。」

「女が男を護るのは当たり前だろ。」

「え?」

「あん?」

鳩が豆鉄砲を食ったような表情になった彼、そして力なく項垂れてしまった。

あたし、何か変なこと言っちゃったか?

「そ、そうですね? 当たり前、ですよねえ。」

「お、おう。」

何だか一気に元気が無くなっちゃったみたいだけど、大丈夫か?

…なんかこの子あれだな、いわゆる世間知らずってやつなのかもしれないねえ。

ここはひとつ、釘を刺しておいたほうが良いのかもしれないねえな。

「あのなあ、キミは男の子で、あたしは女だ。わかるよな?」

「はい。」

「怪我の治療のためとはいえ、見ず知らずの女を自分の家に招き入れるってのは正直どうかと思うぞ?」

「あ、そ、そうですね、俺ってばナンパみたいなことしちゃって…。失礼でしたよね、すいません。」

「は？」

「え？」

…ナンパ？いやそういうことを言ってるんじゃないやねえって。

「よし、良いかももう一度言うぞ、キミは男で、あたしは女だ。」

「はい。」

「キミはもうちょっと危機感っていうか警戒心というものを持ったほうが良いと思うぞ。」

「は、はあ。危機感？警戒心ですか？」



危機感…？それに警戒心か…？

お姉さんの手の治療を終え、俺達は向かい合って話をしていた。

その流れでこんな話になったのだが、なんだか会話が噛み合っていない気がする。

たしかに、治療のためとはいえ、女性を自宅に、なんてまるでチャライ大学生のナンパの手口みたいだと、自分でも思うが。

俺に危機感を持って、か…。

今日のアレは完全にイレギュラーだったと思うし、そう何度もあることじゃないだろう。

危機感…、警戒心か。

でも俺は男で…。

ん、【男】？

ああ…気づいてしまった。

お姉さんが何を言いたいのか、何を伝えたかったのか。

そうか、そうだよ。

なんで気づかなかった、いやまあそれは色々あつて忘れてたんだけどさ！

これはあれだ、男女逆に置き換えたらとんでもないことだ。

『あの、俺の家、来ませんか？近いので。』

完全に誘ってるやんけ。

『あ、俺の家、父親も母親も海外で、今は俺一人で暮らしてるんです。だから気を使わずにくつろいじやってください。』

くつろいじやってください。じゃねえよ！

これあれだ、捉え方次第ではオツケーサイン出しちやってるわ！三塁コーチャー全力で腕回しちやってるわ！

天然ビツチちゃんか!?

ああああやつべえなんか急に恥ずかしくなってきたっ。

「あ、あのあの、俺、そんなつもりで、家に、誘ったわけでは、なくて、ですねっ!?!」

「わ、わかってるから、キミが、その、そういうつもりじゃなかったことはちゃんとわかってるから!」

ふたりしてわたわたしてしまう、俺とお姉さん。

「どうわっ!?!」

「え、ちよ、きやあっ」

ソファの上だったからか、バランスを崩して倒れこんでしまう。

お姉さんはそんな俺を支えようとして、結果としてふたりして倒れ込み…。

「…あ、あの。す、すいません。」

「い、いや、別に、だいじょうぶ、だけど…。」

まるで俺がお姉さんを押し倒してしまったかのような状況に。

急いで退いたほうが良いに決まってるんだけど。

「…。」

俺の目の前にいる女の人は綺麗で、潤んだ蒼い瞳、俺を見つめるその双眸に吸い込まれてしまいそうで。

上気して見える首筋は異様な色気を放ち、金色の美しい長髪からは鼻腔を擦るような甘い香りがする。

胸の奥は五月蠅いほどに鼓動を響かせ、息は苦しく切ない、どうかしなくちやいけないのに、身体は硬直して言うことを聞いてくれない。

「あ、の、おれ…。」

お姉さんが声に出さず、口の動きだけで言葉を紡ぐ。

しょうがねえよ

何がしょうがねえんだ、それってそういう意味なのか、え、おい、マジか、こんな、こんな綺麗な人と俺は！

「お、おねえさ」

意を決して俺が動き出そうとしたとき、テーブルに置いていたスマホが鳴り、震えるバイブの音が響いた。

「は、はは…。」

「ふっ。」

一気に気が抜けた、身体を起こしてスマホを見ると表示されていたのは、父親の名前。

まったく、タイミングが良いのか悪いのか。

「すいません、親父からなんで電話しますね。」

「じゃあ、あたしはそろそろ帰るわ、手、ありがとな。」

「先まで行きますよ。」

「ん、さんきゅ。」

スマホ片手にお姉さんの見送りに外へ出る。

すっかり夜に染まった空の下、互いに言葉はなかった。

「ここまでで良いよ、あんまり家から離れるのも危ないしな。」

「わかりました。」

「じゃあな。」

「あの、…お名前、伺っても良いですか？」

「風見、風見レイナだ。」

「俺は新山良です、レイナさん、今日はありがとうございました。」

おう、と右手をあげるとレイナさんはニカツと笑い、俺に背を向け去ってゆく。

彼女の姿が見えなくなったのを確認すると、俺はスマホを操作し、着信のあった父親に折り返しの電話をかけた。

「…もしもし、父さん。どうしたの？」

世界がアベコベになってしまつて、慣れないことばかりで、正直しんどかつたけれど。

見上げた星空だけは、この逆転した世界でも変わらないまま、俺を照らし続けている。

Re:05 ショタからロリへ

『おい、押すなよ！絶対に押すなよおっ!?!…っ押せよ！そこは押してこいよー!』

テレビでは深夜帯でもないのに紐水着の女芸人が、熱湯に飛び込む度胸試しを面白おかしく行っている。

女芸人も元の世界では考えられない感じのアイドルフェイスで、おまけにナイスバディな人だった。

「…素晴らしいな。」

今日も今日とて、順調に世界はおかしい。



「行ってきまーす!」

「待って待って、お弁当、忘れてるよ。」

「ありがとー!じゃあ、行ってくるね?」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね。」

「はあい。」

行ってらっしゃいのキスをする夫婦、そういえば、うちのご近所の新婚さん夫婦は大体いつもこんな感じだった。

ただ…。

「あ、おはよう。」

「おはよーございまーす。」

スーツを着込んで出勤したのは奥さんの方で、旦那さんは可愛らしい動物さんエプロンを付けて見送る側。

前の世界とは逆になった立場、こういう部分でも逆転現象が起きているのか。

さっきの新婚さんはまだ分かる、立場が変わっただけだから少し驚いた程度だった。

「いらっしやいませー。」

いつも飲み物を買いに立ち寄るコンビニ、前の世界ではこの時間帯には白髪のおじさんが大体レジに立っていたが。

そこには人の良さそうなおばさんが。

「本日限りの大特価です！どうぞお試しください！」

通り掛かる家電量販店、店頭での商品紹介が名物なお店、そこには名物店長のお兄さんがいる筈なのだが。

そこには活発そうなお姉さんが立っていた。

「はい、気をつけてねー。おはよー。」

横断歩道を渡る小学生の列を見守る、旗持ち当番のボランティアをするおじいさんはおばあさんに。

「ふむ。」

女性が中心の世界となったからか、本来男性であるはずの人物が女性に置き換えられている。

量販店の店頭紹介のお姉さんが付けていた名札は、俺の知る名物店長の名字だったし、コンビニのおばさんのもそうだった。

旗持ちおばあちゃんも、小学生に呼ばれた名前はおじいちゃんと同じ名字だった。

ここまでは、驚いたけれどなんとか受け入れられる範囲だ。

しかし、俺は後にこの逆転現象の本領を自らの身をもって味わうこととなるのであった。



「ううむ、女の人が多いなどは思っていたが…性別まで逆転しちゃってるひとがいるとは思わなんだ…。」

唸りながら、校門を抜け、そのまま靴箱へ。

「おう、良。なんだよ今日も浮かない顔してんな？」

「ああ彰人。いやまあ、ちよつとな。」

「なんだよ、なんか悩みでもあんのか？」

「悩みつつーか…ううむ。」

親友と合流し、俺たちの教室がある二階へと向かおうとしたときだった。

「りよーう、あきとー！おっはよー！」

「おわっ!？」

「おおう、伊織か、いつも言ってるだろ後ろから飛びついてくるのはやめろって。」

俺と彰人の間を割って入るような形で腕に飛びついてきたのは、藤宮 伊織。

俺よりも少し低い身長に細い身体、そして彰人とは違う方面で整った容姿。

こいつのアイドルフェイスは、前の世界では一部女子から凄まじいほどの人気があったほどだ。

シヨタ王子、影でそんなふうに使われていたことをこいつは知らない。

ソレに加えて、こいつは俺たちに対してボディタッチが多い。

幼馴染という間柄もあるのかもしれないが、それでも男同士なのにべ

タバタと懐いてくる。

そんなもんだから【新山×藤宮】だの【藤宮×葛城】だの裏で言われちゃうんだぞ。

俺は【受け】でも【攻め】でもありません！ノーマルです！

「ん？」

「どつたの？良？」

「いや、なんでもねえ…。」

「そお？」

「おい、早く行こうぜ。」

不意に感じた違和感。

いや、そんなまさか気のせいだろう。

前を歩く彰人の後に続き、俺達は階段を上がる。

「ちよつと、彰人ってば待ってよー。」

「だから、ひつつくなと言っに！はーなーれーろー！」

…待ってくれ。

「どさくさに紛れて腰を揉むな、この変態めがっ！」
「うふふ、良いではないか良いではないかー！」

伊織くん…？キミ、その、なんで…。

「伊織。」

「んにゃ？どーしたの良？」

違和感の正体、ソレに気づいてしまった俺の全身から、一気に血の気が引くような感覚が奔った。

「おまえ、スカート…？」

「ふえ、うん。スカートがどうかしたの？」

「女でも恥じらいを持ってって言いたいんだよ良は、なんだよおまえ、その短いスカートは。」

「だって、こっちのほうが動きやすいんだもん。べつに良いよパンツくらい見えたってさ。」

良くねえわ！

まさか、そんな、なんとなく嫌な予感はしてたけど。

俺の知ってるやつが、しかも幼馴染で仲の良いやつが、本来は男なのに女になっちまってるだなんて！

シヨタ王子様がロリ姫様にチェンジしちゃってるよ！

腕に飛びついてきたときに、異常に柔らかい感触があったから、何かおかしいとは思ったけどさあ！

伊織、おまえ、なんでおっぱいについてんだよ!?!おまえ、なんでスカートなんて履いてるんだよ!?

「はあ…。」

「おまえ、ほんとどうした？悩みがあるなら俺たちに言えって、親友だろ？俺らはさ。」

「そーだよ、水臭いよ良？」

うん、ありがとうな。

でも、この悩みはお前たちだけには絶対に言えないんだよ、絶対にな！

「まあた難しい顔してるなあ、ほれほれ、こちよこちよこちよ〜！」

「ちよ、やめ、くすぐったいっつーの！伊織！てめ、このやろ！」

「やーん、暴力はんたーい！」

「待てるあつ！」

…まあこいつが女になっていても、伊織がいつもの調子である限り、俺達の関係が変わることはないだろう。

俺と彰人と伊織、三人で騒いで馬鹿やって笑いあえる関係は。

俺たちは、出鱈目に変わっちゃまった、こんな世界でも変わらない。

我等親友永久超絶不滅

「おわっ。」

「ふえ？」

ふにっという感触が手に触れる。

「あ。」

「わ、わりい！伊織！俺、その、今は、わざとじゃねえんだ！」

「良いよ良いよ、おっぱいくらい、なんならもうちよつとさわってみるう？」

「くっ！ばつかおまえ！触らねえっつーの！ほら行こうぜ！彰人のやつも先に行っちゃまったしよ！」

「むふふ、りよーかい。」

「…伊織さん？」

「なんででしょう？」

「なんでナチユラルに腕にひつつくのかなキミは。」

「ボクが、良の腕に、触りたい、からだ！」

「なに強調句風に言っちゃってるのあなたは、はなれろっつーの。」

あらがう伊織を引き剥がし、むくれているやつをおいてスタスタと早足で教室へと向かう。

そうでもしなければ和太鼓のようにドンドコと跳ねる心臓の音がバレそうで、恥ずかしくて紅潮した顔を見られそうで…。

やっべえよ！伊織、あいつ、女になったらとんでもねえ存在になっちゃまつてるよ！

もとから人懐っこいやつだったけど、それでも男同士だったからなんとも思わなかった、むしろちよつとキモいわと思ったこともあった。

それが！性別が変わった途端！

なんだありやあ!?!魔性か!?!あれが魔性ってやつなのか!?!なんであんな可愛くなっちゃまつてるんだあいつ!?!

今日も今日とて、世界は順調におかしいのであった。

Re:06 そこに男女は関係ない

はてさて、どうしたものか。

俺は悩んでいた。

先日の吉沢まどかにした告白紛いのアレ、あの件について一度きちんと吉沢と話さなければと思っていたからだ。

だがことはそううまくいかないもので…。

俺と吉沢はクラスメートだ。

だから当然、朝も昼も放課後にだって話すチャンスはある。

だからこそ俺から吉沢にアプローチを仕掛けようとするのだが…。

『吉沢、今、ちよつと良いか?』

『ふみゆ?! い、いまは、あの、お、おトイレ行かなくちやいけないからあつ!』

バビュンと走り去る吉沢。

『吉沢、一緒に飯でも食いに行かねえか?』

『え? つ!? ああああの! あたしその、だ、ダイエット中だからあつ!』

バビユンと走り去る吉沢。

『吉沢、俺ら帰りに駅前のゲーセン行くんだけど、よかつたらお前もど
うだ？』

『いk…くっ！…ごめんなさいっ！ぶかち、部活いかなくちやいけない
からっ！』

バビユンとry

誤解を解いて友達になる以前に、俺って吉沢に嫌われてるんじゃない
…。

「はあく…。」

「最近溜息が多いな、良。」

「きつと男の子の日なんだよ。」

「だから男の子の日ってなんだよ!？」

日は巡り巡って数日が経ち、今は平日昼飯時。

購買でパンを買ってから教室に戻り、俺、彰人、伊織の三人で机をくつつけてダベるのが、いつもの昼飯の流れ。

俺は焼きそばパン、彰人はメロンパン、伊織はカツサンド、それぞれの味の好みがはつきりと認識出来ることこそ購買パンの凄み。

っていうか、俺が前にいた世界では伊織と彰人の食うパンは逆だったんだけどな。

見た目と性格的に変化がないと思ってた彰人にも、少なからず影響があつたみたいだ。

「おまえ、甘い物全般苦手だったのにな。」

伊織は少食甘党だったのに、なんていうかこつちではガツツリ濃い味系を好んで食べている。

その身体のどこに分厚いカツサンドが吸収されているのだろうか。

「何に悩んでいるのか当ててやろうか?」

「…別に悩みなんてねえっつーの。」

「吉沢。」

「ぶほっ!?!かはっ!はあはあ。」

「うっわ、なにそのわかりやすい感じ。ほら良、お茶飲みなよお茶。」

「お、おうサンキュ、ってあつつ!?!なんでホットなんて飲んでんだよ!?!」

「ボク冷え性なんだよね。ささグイーツと。」

「あつついわ、いらん!」

「…で、当たりだろ?ここ最近、やけに吉沢まどかにご執心だもんな、おまえ。」

「へえ、良つてば吉沢さんみたいな娘が好みなんだあ。…まあボクには関係ないことだけど。」

「あのなあ、そういうのじゃねえからな。…ただ、ちよつと吉沢となんつーかその。」

「喧嘩しちやったとか?」

「喧嘩、とかじゃねえよ。まあちよつとした誤解を与えちまっつてさ。」

「誤解ねえ。」

「…吉沢さんになにしたのさ、良。」

なにもしてねえよ、っていうかなんでむくれてるんだ、おまえは。



『俺は大好きなんだっ！そんな吉沢まどかが！』

誤解、確かに誤解されているかもしれない、…だけど。

誤解ではあるが、あれは俺の本心だ。

俺は吉沢まどかが好きだった、女性としてというよりはひとりの人間として。

老若男女、誰ににでも別け隔てなく優しさを与え、笑顔で照らし、人の心を暖かく包む、吉沢まどかはそういう人間だった。

たとえば、こちらの世界ではそうではないとしても、吉沢まどかは吉沢まどか、人として憧れた彼女の、落ち込む顔なんて見ていられなかった。

自信を持つて欲しいと思うし、なによりも吉沢には明るい笑顔が似合うから、彼女には笑っていてほしい。

これは俺の自己満足なのかもしれないし、もしかしたら欺瞞になっってしまうかもしれない。

それでも俺は、彼女がひとりで落ち込む姿なんて見たくはない。

『あたしがボツチなことなんて、みんな知ってることだし。』

俯いたときに見えた彼女の表情を、俺は覚えている。

どこかあきらめたような暗いつくり笑いだった。

「…なあ、俺たちってどうやって今みたいに話すようになったんだっけ?」

「なんだよ急に?」

「良いから、いつからだっただけ?」

「う〜ん…気づいたらこうやって一緒にいたよね?幼稚園くらいだったっけ?」

「…きっかけはおまえだよ、良。」

「俺?」

「そうだ。おまえが俺の作った砂山に寄ってきてトンネル掘り出して、面白そうだって見に来た伊織も含めて遊び始めたのが最初だよ。」

「あ、そういうええそんなことあった気がする!」

「ああ、それで伊織、おまえが」

「またいっしょに遊ぼうね、ボクたち友達だもんね、だったか。」

「…良も覚えてたんだねえ。」

「彰人のを聞いて思い出したただけだ。…だよな、友だちになるきっかけなんて何でもないような簡単なことなんだ。」

小難しい会話も、感情の読み合いも必要ない、ただ正直に相手に伝えれば良いんだ。

吉沢まどかがこのまま独りでいることを選ぶ、というのなら俺は何もするべきじゃないのかもしれない。

だけど、あの表情を見てしまったからには、俺は彼女をボツチのままではいさせられない。

「…彰人、伊織、俺は…吉沢と友達になりたいんだ。おまえらみたいな、女とか男とか関係なく、心から打ち解けられる関係を築きたいと思ってる。」

自己満足でもなんでもかまわない、彼女が望むのなら、俺は吉沢まどかの友達になりたい。

Re:07 譲れない真理、変わらない想い

この世界に来て、いろいろなことに驚かされた。

そのなかのひとつが【学園のトイレ】である。

まず、トイレの手洗い場だが…、アニメティグッズの豊富さだ。

爪楊枝は分かる、前の世界でも置いてあるところは置いてあったからね。

口臭ケア用品、ハンドケア用品、衣類消臭スプレー、汗拭きシート…等々。

俺が直接見たわけではないが、レストランとかホテルには化粧水なんかも置いてあるらしい。

ちなみに鏡は小型な物ではなく、縦長タイプの鏡だ。

信じられるか…？ここ…男子トイレなんで…？

そして、利用中に聞こえてくる男子達の会話内容。

どこのクラスの女子がキモい、まあ分かる。

ひどいと思われるが人にも好みがあるからね。

でもね、理由が『胸をジロジロ見てくる』『笑い声がキモい』『やけに絡んでくる』『汗くらい拭け』『臭いが嫌』『存在が無理』

一部なんとなく分かるのはある、でもどれも女子が言ってたようなものばかりだ。

次、放課後どこ行く系の話。

ゲーセン、カラオケ、駅前、まあ分かる。

『ケーキの美味しいカフェがあつてさあ。』『可愛いピアス売つてるとこあつたんだぜー。』…うん。

女子か!?

おまえらホントにチ○コついてんのか!?

甘党、良いだろう。

好みの問題だ。

でもカフェで!?カフェでケーキ!?モンブラン!?男同士で!?ボーイズデイってなんだよ!?

おまえらホントにチ○コついてんのか!?

ピアスを買うに行く。

うん、校則的に褒められたものではないが分かるぞ。お洒落は大事だもんな。

でも可愛いて!?ワンポイントでハート!?ピンクでキラキラ!?クマさんのかたちってなんだよ!?

おまえらホントにチr y

と、これだけでも頭が痛くなるが細かい部分をあげればキリが無いので割愛。

ほんと、この世界の男子は乙女か!?

日本男児はどうした!?

大和魂は、漢と書いてオトコとは読まんのか!?

乙女と書いてオトコと読みそうな気がする。乙男とか?

なんか字面で見たらしようもねえな、「乙男w w w w w w w w」とかネットで煽られてそうだわ。

草を生やすな。

チ○コ生やせやおまえらは。

上手いこと言った!…そうじゃねえだろアホか俺は。

まったく、今になつてもこういう部分は頭が痛くなる。

エロ本の話で下校時間まで熱く語り合ったあの頃が、懐かしいぜ。

そうエロについてだが、この世界の女子はオープンエロな娘が多い。
い。

『おまえ、濡れてんじゃね?』『へいへーい乳首へーい!』『つべえわ男

子の胸板つべえわ、埋もれてえわ。』『男子もオナ○ーとかするんかな？』『うなじ舐めたい。』『ちくわ大明神。』

どれも男子のいる場所で聞いた言葉である。っていうか最後のはワケがわからん。

なんだよ、ちくわ大明神ってどこの神様だよ。

：俺ら男子は向こうの世界で思われてたんだろうなあ、キモいわ!? 最初は興奮しry:が、今となつては怖いまである。俺らのいないところで盛り上がって頂きたい。

一方の男子はムツツリが多いわかる、わかるが、話の内容がエグい。

『あいつ愛撫くつそ下手でさあ。』『しごくだけじゃ濡れねえつての』『胸とかぶつちやけ感じなくない?』『自分だけイって仕事した感だすなっつーの』『ちく』

直接的過ぎる。

女子とは逆で、男子はこういう部分を一切女子に見せないのだ。

普段は『エロ話とか最低だよな』とか言ってるやつが、裏では『あいつち○コ被っててさあ』とか抜かしてやがるのだ。

確かに向こうの世界でも男子はエロかった、寧ろエロこそパワーだった。

だが、こちらの男子はそれとは違う。

説明するのが難しいが、とにかくお下品お下劣である。

違うんだよ！俺は、俺はもつとカラツとしたエロ話がしたいんだよ！ヌメツとしたエロ話はしたくないんだよっ……！

エロとは爽快でなくてはならない。

これは真理である。



『…彰人、伊織、俺は…吉沢と友達になりたいんだ。おまえらみたいな、女とか男とか関係なく、心から打ち解けられる関係を築きたいと思ってる。』

驚いた。

良は、そんなことを言葉として誰かに伝えるようなタイプではない

と思っていたから。

誰とでも直ぐに仲良くなつて、気づけば良を中心にコミュニティが出来ている、そんなタイプだと思っていた。

実際にボクら古い付き合いの場合もそうだったし、最近つるむようになつた人たちもそうだった筈だ。

きつと、それほどに吉沢さんを思つて、何かしらの事情があつて『友達になりたい。』とボクらに打ち明けるまで至つたのだろう。

真剣な彼の言葉に、ボクと彰人は、ひとつ深く頷く。

ボクは、良の力になりたい。

今までもそうだったように、これからもずっと。

これだけは彼との関係が続く限り変わらない。

だってボクにとって彼は、新山 良は…。

幼馴染みで、親友で、そして…。

「吉沢さん、ちよつと良いかな?」

教室を出てきた女の子、吉沢 まどかを呼び止めた。

少し驚いたような表情。

それもそうだ、だって今まで彼女とは挨拶をする程度の仲だったから。

こうして話しかけることなど、滅多にないからね。

不思議そうな表情を浮かべる彼女に、ボクはにこやかに言葉が続けた。

「吉沢さん、陸上部だよね？こんどうちの部活で備品を借りることになつて、良ければ事前に見ておきたいんだけど。」

胸のなかでモヤモヤするなにかを押しえつけながら、ボクは人受けの良い笑顔を作った。

Re:08 向日葵と太陽と

薄暗い体育倉庫、うちの学園には部活それぞれの用具をしまうスペースはなく、この場所にて用具の管理がされている。

だからか異なる部活同士で用具の貸し借りが頻繁に行われており、部活間での交流も盛んだ。

それは陸上部においても例外ではない。

「…なんか、緊張してきたな。」

棒高跳び用の大型マットに腰掛けながら、待ち人を待つ。

スマホが鳴る。

『いまからそっち行くね。』

短いメッセージは伊織からのもの。どうやらうまく誘えたようだ。

『良は急な腹痛で伊織と吉沢は付き添い、高橋先生には話つけてあるから、ゆっくり話して来いよ。ノートは取っとくから。』

こっちは彰人、あいつは教師からのウケが良く、こういうときに

は誰よりも頼りになる。

『ボクもこのままサボっちゃおうかなあ。』

『馬鹿言うな、おまえは戻ってこい。』

『(*??.?*)』

『泣いてもダメです、もどってらっしゃい。』

『あんまりだよパパン。』

『誰がパパだ！良と違っておまえはヴァカなんだから授業受けとけて。』

『ええく…。めんどくさいなあ。』

『伊織ちゃん、この前の中間テスト、数学は何点でちたか？』

『14点でちゅ☆』

『帰ってらっしゃい。』

彰人と伊織のやりとりを見ていたら緊張が薄れてゆく、ほんと頼りになる友人たちだよ。

そうこうしているうちに体育倉庫の重い扉が開いてゆく。

マットから起き上がり、射し込んでくる光、そのなかから吉沢まどかの姿を確認した。

「…よし。」

「え…？あれ？新山？なんで？」

「れつつぐードーン！」

「ふぎゃん!？」

「おっとと、こちら伊織！」

「あとは若い二人でごゆっくり〜。」

「えっ!?ええ!?ちよつ、藤宮s」

吉沢の声が届くことはなく、無情にも体育倉庫の扉が閉まり、カチャリという音が響く。

全学年で全クラスで唯一、体育の授業のないこの時間ここには誰も来ない。

未だに何が起きているのか分からず、アワアワしている吉沢と向かい立った。

あとはただ、まっすぐにぶつかるだけ。

「に、新山？」

「急にこんなことになって悪い、でも吉沢とはどうしてもゆっくりキチンと話しがしたくて。」

「あ、うん…。」

「このまえのこと、なんだけどさ。」

告白まがいのこと、先ずは誤解させてしまったことについて話さなくてはならない。

「あの時、言いかたが」

「ごめんなさいっ！」

「へ？」

いきなり謝られたので思考が止まり、間抜けな声が漏れた。

「新山は、あたしが落ち込んでたから気を使って優しくしてくれたんだよねっ、なのにあたしってば勘違いしちゃって、勝手にひとり盛り上がりしちゃって、だから…。」

「待て待てそうじゃない、俺の話をだな。」

「新山があたしなんかを好きって言うてくれたのは嬉しかった、でも、あたしはほら、こんなんだからきつと新山とは」

「吉沢っ！」

「は、はい。」

「大きな声出しちゃってごめん、でも、俺の話を聞いてくれ。お願いだ。」

「うん…。」

捲し立てるように一気に吉沢の口から出てきた言葉を聞きたくなくて、俺は強引に遮った。

あのまま行けば、吉沢はまたあのときのように勝手に自分であきらめて去ってしまいそうだったから。

そうじゃないんだ、俺はおまえにそんな顔をさせるために此处に呼び出したわけじゃないんだ。

「吉沢は自分のことを『なんか』とか『ボツチ』とか言うけど、俺はそんなことはないと思う。」

「でも、あたしはさ」

「入学した時、伊織や彰人と違うクラスになって最初は不安だった。そんななか、おまえが話しかけてきてくれて嬉しかった。不安とか、緊張とか、そういうのが一気に晴れて、すごく助かった。」

「あ…。」

こちらの世界での吉沢まどかのことを、俺はよく知らない。

だからこそ、俺は彰人や伊織を頼ったのだ。

「吉沢は優しくて気が利くし、話すと楽しい、それは俺が断言できる。」

吉沢まどかを知るために、吉沢まどかに笑顔になってもらうために。

「ボツチなんて言うなよ、挨拶を交わして、馬鹿な話もし合ってさ、一緒に笑って、俺は吉沢とは友達だと思ってるぞ。」

これは俺の自分勝手、自己満足で押し付けで、嘘で塗り固めた欺瞞であるかもしれない。

「もし、今、吉沢が俺とは友達じゃないと思っているのなら、あらためて言わせて欲しいんだ。」

今日も今日とて世界はおかしい、女の人が男らしく、男の人が女らしい、俺からすれば何もかもがアベコベで、とんでもない状況だけど。

俺が、この子に心から笑って欲しいと、この子の支えになってやりたいと思うこの心に、嘘はない。

「吉沢まどかさん、俺と友達になってくれませんか？」

彼女の向日葵のような笑顔を隣で見たいから、俺は手を差し出した。



あたしは、自分が周りからどう思われているのか、それを知るのが怖かった、自信がなかったし、勇気も持てなかった。

あの日、たまたま席が隣になった男の子が何故か気になって、退屈そうにしている彼に話しかけたのは、自分でも思いもよらなかったことで、本当に自然と身体が動いて、自然と話しかけていた。

彼と話すのは楽しくて、それからは話す機会も多くなって、多少なりとも自分にも自信が付いてきたような気がしていた。

ある日のこと、部活を終えて帰宅しようと倉庫の横を通ったときに、男の子たちの会話を偶然聞いてしまった。

『そういうばさ、一年に吉沢まどかっているじゃん?』

『ああ、あの陸上部の?』

不意に聞こえてきた自分の名前に、足が止まる。

『あいつの胸、やつべえよな?』

『あれな、牛かよっつーの。』

『たしかに、尻もでけえから牛っぽいわ。』

『顔は悪くねえんだけどな、あの胸と尻は無理だわあ。』

『おつまえほんとひでえ奴だなあ!』

『おまえもだろーが。ギャハハハハ!』

なんてことはない会話、男の子同士のバカ話だ。

でもなぜだかあの子たちの言葉が鋭い棘のように突き刺さり、あたしは心のなかで前へ進もうとしたところを座り込んだ。

他人の目が怖い、他人にどう思われているのかが怖い。

「よ、吉沢、おはよう。」

「あ、うん。おはよ。新山。」

それでも彼に対してはそんな恐怖はなく、自然と話して笑い合えていた。

彼とは良い友人になれる気がする、いや、あたしは勝手にそのさきの関係になれば良いなと思っている。

彼は優しくて、明るくて、温かい。

話し上手で聞いているだけでも楽しい、聞き上手で自分のことをもつと聞いてほしいと思えてしまう。

誰にでも気さくで、誰とでも仲良く出来る、まるで太陽のような男の子。

惚れるな、というほうが無理な話だ。

彼は自分にとって特別な人、他人が怖くとも彼ならば大丈夫。

でも彼は、彼の周囲は、あたしと接することをどう思うだろう、どのように捉えるだろう。

「そうだ、吉沢。LANE教えてくれよ。」

「え、あ、……ごめん、あたしそのLANEとかそういうの苦手でさあ！スマホもうまく扱えなくて、電話しかしないっていうか！」

そうだ、あたしは彼と話せるだけで恵まれているんだ。

これ以上を、なんて烏澁がましい。

彼にはもっと相応しい友人がいるし、恋人ならば尚のことだ。

知人以上、友達未満、それだけでも充分なことじゃないか。

自分のような暗い人間は、ひっそりと日陰で空を明るく照らす太陽を眺めていれば、それで良い。

Re:09 日の当たる場所へ

『俺は大好きなんだっ！そんな吉沢まどかが！』

あの瞬間、あたしの心臓は爆発してしまうほどに跳ね上がった。

嬉しかった、飛び上がりたくなる程に。

でも、何を言ったら、どんな返事したら良いのか分からずに。

結果として、あたしは彼の前から逃げ出してしまった。

きっと彼は、落ち込んでいたあたしを元気づけるため、あたしを好きだと言ってくれたのだろう。

舞い上がり、勘違いをしてしまった自分が恥ずかしかった。

何の言葉も返さずに、彼の前から逃げた自分が、いったいどのような顔で彼と接したら良いのか分からなかった。

『吉沢、今、ちよつと良いか？』

『ふみゆ!?いい、いまは、あの、お、おトイレ行かなくちやいけないからあっ！』

それまでなんとも無かった彼とのやり取りが怖く感じた。

もしも、自分の思いに彼が気づいたら？

そう考えれば考えるほど、あたしは臆病になり、卑屈な考えに拍車がかかっていった。

このまま、彼を避け続けるのが正しい対応じゃないことは分かっていた。

だからこそ、あたしは今になってこれまでの自分の態度を酷く後悔しているのだ。

「吉沢まどかさん、俺と友達になってくれませんか？」

彼が右手を差し出す、あたしを真っ直ぐに見つめながら。

彼がこんなにも歩み寄ってくれている。

あとは自分の心ひとつだ。

わかっている、この手を取れば素晴らしい日常が自分を待っていることは。

自分が望んでいた日々が、今まで以上に彼と笑い合える日々が目の前にある。

それなのに、あたしは…。

「吉沢…？」

『顔は悪くねえんだけどな、あの胸と尻は無理だわあ。』

あの日見た光景、聞こえてきた声が、彼に重なる。

違う、なんで今になってこんなことを考える。

今になって、いや、あたしはずっと恐れていた。

「あたし、ほら、あんまり他のみんなから、好かれてないっていうか、だからその、あたしみたいなのといたら新山に迷惑が…。」

柔らかい感触があたしの手を包み込む。

「そうじゃない、そうじゃないだろ？他のやつがとか、そんなんじゃない。おまえはどうしたい？吉沢は俺をどう思ってるのか、それを聞かせてくれないか？」

勇気づけるように優しく、それでも言い聞かせるようにしっかりと、彼の言葉が声が響いてくる。

「俺は、吉沢まどかと友達になりたい。おまえはどうなんだ？嫌なら嫌だっけはつきり言ってくれて構わない。」

「あ、あたしは…。」

あたしはどうしたいか、そんなこと決まっている。

もらった勇気を振り絞って、彼を真っ直ぐに見つめる。

「あたしも、新山と、友達になりたいよ。」

「よし、なら俺と吉沢は今日から友達だ。…よろしくな。」

うん、と頷いたあたしの頭に、ポンと彼の手が乗せられた。

擦ったい、けど優しくして温かい気持ちになれる。

「他の奴らなんて気にすんなよ、もしも吉沢を悪く言うやつがいたらさ、俺が友達としておまえを守るから。」

「…ほんと、新山ってずるいよね…。」

「なんか言ったか？」

「なんでもないっての！」

すつと彼から離れ、倉庫の扉を背に彼を見つめ直す。

ニツと笑う新山、あたしが一番好きな彼の表情だ。

「つたく、そんなんだから…勘違いしちゃうんだって…。」

「吉沢？」

「ねえ新山。」

「おう、なんだ？」

鍵が開いていることを確認し、後ろ手にゆっくりと体育倉庫の扉を開けてゆく。

「あたしもあんたが、そんな新山良が大好きだよっ！」

「んなっ!？」

「勘違いさせたお返しだよ!ばっか!」

「おまえ、ちよ、待てっ!吉沢あつ!」

そのまま彼の声を背に駆け出した。

彼の前から逃げ出した理由は、あの日と同じで恥ずかしかったから。

でも今日の恥ずかしいという気持ちは、あの日と違う、心地よい感覚だった。



「ふう。」

友人とのやり取りを終えて、スマホを机に置き、そのままベッドへ飛び込んだ。

「いよいよ明日か。」

ちょうど頭の上の位置に壁がけてあるカレンダー、明日を示す日付には赤いボールペンでこう書かれていた。

〈復学、おつとめ終了。〉

五ヶ月という長いようで短い期間を終え、明日から再び学園へ通うことになる。

復学を喜ぶ友人の姿を浮かべると同時に、きっと自分を歓迎しない連中も少なからずいるだろうと思うと多少イラつく感情もある。

教師に対しての暴力行為で停学五ヶ月処分、傍から見ればとんでもない不良生徒だ。

起き上がり、身なりを整えるために部屋においてあるウォールミラーの前に立つ。

高い身長、腰元まで伸ばした金色の髪に、先の尖った目、その中には他の連中とは違う蒼い瞳。

…どっからどう見てもキッツいヤンキー女がそこに立っている。

この髪は地毛だし、眼だって自前の天然物。

どちらも尊敬する両親から授かったもので、恥じるどころか誇れるものだと思っている。

「…このままで良いよな、今までも地毛で通してきたし。」

ニツコリスマイル。

怖い、通報案件発生である。

「まあ、ふつーにしとけば誰にも何も言われねえさ。」

平和が一番、キャツキヤウフフなスクールライフ、エンジョイするんだ明るい未来を！

明日から、あたしは生まれ変わるんだ、風見レイナは普通の女の子になります！

ほおら普通に、普通に…。

ニツコリスマイル。

怖い、回覧板で晒されるまでである。

鏡を前にしての一人百面相大会は、その後数時間、夜通し続いたのだった。

Re:10 写生大会、日本語は難しい

写生大会、それは物や風景をありのままに描き、その出来を集団で競い合うという行事である。

一般的にこの写生大会、真面目に受けようとするものは極々一部だけであり。

大部分の生徒は仲間内で集まって適当に時間を潰し、出来の良い生徒の絵を模写し、教師の目を誤魔化すものであると思われる。

さて、以前にも説明したことがあるが、うちの学園の男女比は圧倒的に女子生徒が多い、ひとつのクラス約35名のなかで男子生徒が2から3人いれば良い方であり、残りはすべて女生徒である。

故に、今日のような行事ごとでどのような現象が起こるか、語るよりも見る、である。

「うおっしやあつ！新山獲ったどく！」

「うえ〜い！うちらマジ勝ち組っしょ〜！」

「いまの後出し！後出しだよ！やりなおしだよ、やりなおし！」

「見苦しいよ委員長！」

「そうだそうだ〜！」

「…俺の意思は？あ、ないの？マジで？」

「葛城はうちらと一緒にだからね。」

「ほうれ、ちやつちやと歩けえい。」

「良、助けてくれっ。こいつら目が血走ってやがる…！尻を撫でるなっ!?伊織、伊織イ！何とかしろ、頼む、何とかしてくれえっ！」

「…ごめん、彰人、ごめん、良。ボクは、あまりにもつ、無力だった…！」

「藤宮ちゃん…じゃんけん弱すぎつしよ…。」

「うあああん！男の子ほしいよおおおお！男子力が足りないよおおおお！」

「トレード！トレード希望！加納ちゃんと新山君を1…1でトレードしてー！」

「ぎっけんなこら！レート安すぎだろ！学食の食券一年分持つてこいやあつー！」

「独占禁止法だよ！断固抗議するよ！」

「誰か法廷持つてきてー！」

「うぐつ、ひぐつ、負けちゃった…。」

「どんまいだよ、吉沢さん…。」

「結果としてボツチ集団が出来上がっちゃったねえ。ま、よろしくう。」

こうなります。

グループ分けされた女生徒達による、男子争奪ジャンケントーナメントである。

俺は知らなかったが、行事の円滑な進行と公平性を保つという理由により、古くからの伝統とされているらしい。

ああ…、今なら景品の気持ち分かる。

まるで神輿のように担がれながら、澄み渡る青空を眺め、俺は物思

いに耽るのだった。

耳元では仔牛が売られてゆく例のテーマ曲が繰り返し流れている。

あの仔牛って結局食べられちゃうのかな？

そうか、きっと俺も食べられちゃうんだ。

食べられちゃうんだ（意味深）

…いや、悪くないかもしれんぞ。



「よろしくねえ新山あ。やばっめっちややばいっしょ☆」

なにがやばいのでしょうか？

こいつは桜川 さくら（おうかわ さくら）、派手なメイクに茶髪にピンクのメッシュを入れた、見て分かるとおりのギャルだ。

非常に奔放な女の子で、男関係の話では桜川の右に出るやつはいない、と言われるほど。

童貞百人斬りだの、48時間対抗セックスマラソンだの、男根ダービーだの、とにかく異次元の存在として女子たちからカリスマ的な人気を誇っている。

なんだよセックスマラソンって、男根ダービーってナニするの？

改造が施された制服のシャツの下からはヘソが覗き見え、スカートはギリギリのラインを保つ奇跡の絶対領域を維持している。

見えそうで見えない、ナイスエロスである。

じゃんけん大会の結果、俺は桜川を中心としたグループの一員として写生大会に参加することとなった。

「うえ〜い☆ほれほれ新山もっ☆」

「う、うえ〜い?」

助けてっ！テンションに押しつぶされちゃうう！

っていうか何なのこの娘っ！伊織以上にスキんシップがデーンジャーなんですけどっ!?

俺の知ってる桜川は読書好きの地味な美人さんだった筈なのに、どうしてこんな娘に育って(?)しまったのか。

まったく正反対の陽の者にクラスチェンジされておられる。

これも世界がおかしくなった影響なのか、ほんつとに無茶苦茶だな！この世界は！

「ねえ、新山。」

「なんだよ？」

「「しゃせー」大会、ガンバローね？」

なんで微妙に語尾を伸ばしたし、おいこら指で輪っか作って上下に振るんじやありません。

お絵かきをするんですよ？

マスクするんじやないんですよ？

いかんぞ、これは非常にいかん。

だがしかし、あれだな、ここう、桜川の見えそうで見えない胸元とか、腰のあたりとかを見ちやうとだな…。

あれだ、熱くなるよな。

色々と、な。



「そつかく二年生は今日写生大会なんだね。」

「そういえばそんな時期か。」

此処は屋上、授業を抜け出したあたしは紅茶片手に外を眺めている。

横で同じように外の様子を眺めているのは、友人の相馬 梨花（そうま りか）。

付き合い自体は、この学園に入ってからとの関係だけど、感覚的には長年つるんだ相方のように仲が良い。

「あ、じゃんけんしてる！あたしたちもやったよねアレ。」

「やったなあ。結局男子と組めなくて、女連中で悲しくお絵かきすることになったけど。」

「そうそう、でもレイナってばまったくやる気なくって、もうすぐ終了っていうのに縦線一本だけ描いて『木』とか言ってるさ。」

「しょうがねえだろ、ああいうのは昔から苦手なんだよ。」

絵を描いたり、編み物をしたり、洋服を縫ったり、という所謂芸術という分野にはあたしは向いていないと断言できる。

瓦割ったり、バット折ったりは得意なんだけどな。

「あはは、ねえ見てよアレ！男の子が担がれてるよっ、神輿かつ！」
「あん？ぶはっ！なんだよありや、バカみてえなことやってんなあ。」

遠目からだから運ばれてるのが男の子ってことしか分からなかったが、テンション上がりすぎだらあいつら。

ああいうふうにはバカなことが出来るっつーのは良いことだ。

「うげっ、授業抜けたことバレたっぽいよ。」

「マジか。」

「どーしよっか？」

「あー：取り敢えず保健室行こうか。腹いてえって呻いてりやなんとかなるだろ。」

「奥義、女の子の目を使うんだね？」

「奥義ってほどのもんでもねえだろ。」

後輩たちの喧騒を背に、あたしたちは屋上を後にした。

今日も今日とて、空は青く、風が心地良い。

友人と過ごす何気ない日々こそ、自分にとってはかけがえのない宝物なんだ。

Re:11 伏兵

時刻は昼時、ここは学園から少し離れた場所にある河原。

どうせ描くなら自然風景のほうが良くない？☆という桜川の意を汲み、ここにやってきた俺達は各々作品を描く…訳もなく。

「はあい新山あ、さくらちゃんお手製のサンドウィッチをどうぞ☆」
「いや、自分で食べるから。」

首に組み付かれ、足を絡ませられながらの昼食。
どういいう昼食だ！

人気につきにくいこの場所を選んだのはコレが狙いだったんじゃないか、と思う桜川のスキンシップ。

こいつがビッチ（この世界では褒め言葉）と言われるが所以がわかったような気がする。

なんなの本当にもう！腕を組むから始まって胸を擦り付けたり耳に息を吹きかけてきたり、いや、まあ俺も男だし？嫌なわけじゃないけど、でもさ、もつとこう節度つてもものがあるんじゃないかな!?

あと顔が近い！

他の連中はどうやら見張り役のようで、俺達の周囲を警戒するように布陣を敷いている。

「ウチね、新山のことずっと狙ってたんだあ☆」

「狙っ!?はあっ!?!」

この状況で急にそんなこと言うかよ!?

「ほら、ウチってば見た目が派手じゃん？だから敵も多くてさ、陰口言われるのもしょっちゅうで。身に覚えのない噂とか流されたりとかや。」

まあこうも目立つやつならそういうのもあるだろう、有名税、というやつだろうか。

「二年生の終わりだったかなあ、放課後に隣のクラスの女子たちが話してるのが偶然聞こえてきてさ、まあウチの悪口だったんだけどね。」
「…おう。」

どこの世界にもこういう話はあるもんだ、人のいないところで好き勝手言いたい放題、良い気分はしないが人間関係を構築するには他人の悪口を共有する、という行為は比較的ラクな方法だったりもする。

「ああまた言われてるわ、って思って少しオチてたんだ、でもそんなときにな、男の子の声が聞こえたの。」

「男の子…?」

「新山 良って子の声がね。」

「俺えっ!?!」

まったく身に覚えがない、いやそりゃあ一年の頃の話だから、俺がこの世界に来る前のことで、身に覚えがないのは当たり前のことだが…。

『そういうこと、あまり言わないほうが良いぞ、陰口って言うほうが良い印象持たれないし、言われた側もショックだし、損しかしないから』って。馬鹿みたいに真っ直ぐで笑っちゃったんだよね。」

「俺がそんなことを…?」

愛想の良い新山だから言えたんだね、とクスリと笑う桜川。

「嬉しかったなあ、【あたし】のことなんて全然知らない子なのに、まあ新山はそんなつもりはなかっただろうけど、庇ってもらったっていう

か、擁護してもらったっていうの？…なんか助けてもらった気がしてさあ。」

「桜川…。」

いつもの人をからかうときのような悪戯な笑顔ではない、優しく微笑む彼女に、俺は見惚れてしまった。

「ねえ、新山、ウチと付き合ってよ。…今までこんな気持になったことない、マジだからね、ウチ。」

「っ。おま、今、何をっ、」

頬に触れた柔らかい感触、それは桜川さくらの唇のもので、自分の顔がまるで火にかけられたヤカンのように急速に熱を上げてゆくの
がわかる。

「言ったっしょ？ずっと狙ってたって…さ☆」

「桜川、俺は…。」

頬に触れる桜川の手、子猫のような瞳に吸い込まれるように、俺と桜川の距離が縮んでゆく。



「藤宮さんってさあ、新山くんとうなののお？」

「え？どうってなにが？」

校庭の端っこで絵を描いていたボクたち、適当な駄弁りから意外な

話題が投げ込まれてきた。

ゆつたりとした口調でボクに話題をふってきたのは、同じクラスで仲の良い加瀬さん。

「いや、ふたりつて幼馴染なんですよ？幼稚園から一緒って聞いたよお？」

「まあ、うん、一応ね。」

まあいつも自分なりにアピールはしてるし、周りの人達にそう思われてるっていうのは、正直なところしてやった感はある。

「幼馴染ってだけで特別こう、なにかあるとかじゃないよ？」

「ほんとにいい？」

今は、ね。

今に至るまでのアピールの効果が出ているのか、最近の良はボクを女として意識してくれていると感じる。

このまま攻め続けられれば……。

「ほんとだよ、ボクたちってほら、男女の隔たりがないっていうか、友情の絆で結ばれてる的な？」

「なにそれ怪しい。」

良や彰人との友情を保ったまま、自分の恋を成就する、それはボクの中で実に難しいことだった。

友情と愛情は異なるもの、それはわかっていたが、それでも気持ちちを分けるというのは難しい。

ボクにとつて彰人と良は親友、大切な人だ。

代わりなんていないし、きつとずっとこの友情は続いていくと信じている。

だからこそ、ボクが良と結ばれることで三人の関係が壊れたり、歪

な形になるのは避けたかった。

きつと彰人はボクの想いに気づいてるはずだ、あえて何も言っていないのは彰人らしさ、ボクの思うとおりにしろ、ってとこなのかな。

本当は卒業を待つて告白するつもりだったけど、吉沢さんのこともあるし、少し予定を早めて…。

「あの、さ。ちよつと良いかな?」

「なあにメグ。」

ボクと加瀬さんの話に申し訳なさそうに入ってきたのは、メグの愛称で呼ばれている双葉さん、下の名前が恵だからメグと呼ばれている。

「ほんとはこういうの黙ってたほうが良いんだろうけど、さつき教室出るときに聞いちゃってさ…。」

「なにを?」

「さくらちゃんがね、今日、新山くんに告るって。」

「なっ…!?!」

桜川さくら、おまえもか!?

とんでもないところから現れた伏兵、しかも今にも本陣に攻め入ろうとしている脅威に、ボクの脳内は真っ白にそして忙しなく思考が駆け巡る。

桜川さくらは危険だ。

同じ女として彼女は脅威が以外の何者でもなく、ボクに勝てる要素が見当たらないモテ女。

天性のビッチ故に、まさかそんな良に対して好意があったなんて思ってもみなかった。

こうしてはいられない、ふた리를探し出さなければ…!

「ちよ、藤宮さん!どこ行くのお!?!」

背後から聞こえるクラスメートの声を無視し、ボクは全力疾走で良のもとへと急ぐ。

「ええい…、冗談ではないっ！」

いつもの三倍は速く走れているだろう速度で、ボクは校庭を抜け、桜川さん達が向かっていった方向へと向かう。

良、どうか無事で！

清い身体のまままでいてね！

Re:12 想いに応えるということ

「ちよつとベタベタしすぎなんじゃないかなあつ！」

「ちよ、吉沢ちゃん、バレるっ、バレちゃうって！」

「さすがはビチ川さん、やるなあ。」

「木城さんも感心してないで止めて！」

「えく無理だよく良いじゃん野に放っちゃいなよ田中ちゃん。きつと楽しいことになるから。」

「あたしは佐藤だって何回言ったらわかるのさ！」

「佐藤も田中もおんなじだつて。」

「違うわっ!?!」

たまたま同じ組になったクラスメートの木城 初音さん、そして佐藤 香子さん。

木城さんの提案で、桜川さんたちの後をつける形で河原まで来たんだけど。

何なのあれは!?

桜川さんってばめっちゃベタベタしてるし!新山も鼻の下伸ばしちゃってるし!

おいこら待てや!サンドウィッチあーん、はあたしがやってあげる(予定) んじゃ!

あたしだつてお弁当作つて来たのに!料理は苦手だけど頑張ったんだぞ!

「お、イケるね、この玉子焼き。」

「あ、ほんとうだね。男の子受けしそうな、ほんのり甘い薄味。」

「なに食つてんだよおっ!?!それはあたしが新山に」

「ほれ吉沢さんも食べて食べて、これうちのおとんお手製の唐揚げ。」

「なにこれすごい美味しい。」

「でしょく？木城家のコックは優秀なのだよ。」

「わたしにもちよーだい！…うわ、なにこれすごい美味しい。」

隠し味は味噌かな？香ばしい香りが口の中いっぱい広がって、
ジューシーさを際立たせて…ってそうじゃないでしょ!?

「あ、なんかチューするっぽくない？」

「ふおおおつ、いくの？いっっちゃうの桜川さん!？」

「チューだとうっ!？」

そんな狼藉、目の前でされてたまるもんか！

「おお。」

「ちよ、吉沢さん!？」

迷うこと無くあたしは繁みの中から飛び出した。

「ちよつと待ったああああああつ!!!」

は？

飛び出した先、あたしの直ぐ隣には滝のように汗を流す藤宮さんの
姿があった。

「吉沢、さん？」

「ふ、藤宮、さん？」

ナズエココニイルンデイス!?

どうして藤宮さんが此処に？いや、気にはなるが、今はそんなこと
よりも新山と桜川さんだ！



自分の全神経を研ぎ澄まし、良の痕跡を追った結果、辿り着いたのは学園から少し離れた河原。

わかりやすいことに、桜川さんと同じグループだった子が河原の入り口付近で暇そうにしていた。

危険だとは思いつつもコンタクトを図り、秘蔵の彰人腹筋コレクシヨン画像で買収。

迅速的にボクはふたりの居場所を聞き出したのだった。

「っ、見つけた!」

あれは良の背中! 引っつもひつついてたから間違える筈もない!

「り…」

呼びかけようとした時、ボクに戦慄が奔る。

良の真正面、すぐ近く、それこそ口と口が触れそうになるほどの距離に、桜川さくらの姿。

おい待てこらビッチ! その口はボクの(予定)なんだぞ!?! ふっざけんなよ、目の間でキスなんてさせてたまるかあつ!

全速力を維持したままでボクは繁みの中飛び出した。

「ちよつと待ったああああああつ!!!」

飛び出した先、ボクの隣には凄い形相の吉沢まどかが立っていた。

「吉沢、さん?」

「ふ、藤宮、さん？」

おのれ吉沢まどか！なぜキミが此処にいるんだ!?



「言ったつしょう？ずっと狙ってたつて…さ☆」

「桜川、俺は…。」

猫のような可愛い桜川の顔が直ぐ近くまで迫ってくる。

こんな可愛い子から告白されて、迫られて、男からすれば夢でも見てるんじゃないかと疑いたくなる状況だ。

…でも。

俺はここで桜川さくらの好意に応えることは出来ない。

だって桜川が惚れたという俺は、今、こうして彼女と向かい合っている俺じゃない。

俺は俺だ、新山 良という存在に違いはない、だけどころいうことは、こういうことだけは、こういうことだけはそう簡単に割り切って良い問題じゃない。

俺は桜川さくらという人間をよく知らない、前の世界の桜川さくらとは挨拶を交わす程度だったし、こちらに来てからも軽口を言い合う程度だった。

彼女の俺に対する好意は素直なもので凄く嬉しい、嬉しいけど、そうじゃない。

出鱈目な世界、異常な男女比、男子のように軽い貞操観念の女の子、女子のような男の子、何もかもが今まで生きてきた環境とは異なる世界…。

それでも人を好きになるということ、女の子と愛を語らうっていう

のは、こんなふう流されてすることじゃない。

「新山…?」

「ごめん、桜川、俺っ！」

桜川の肩を手でおさえ、触れる直前の距離で彼女のキスを拒んだ。
そんな時だった。

「ちよつと待ったああああああつ!!!」

「うるせっ」

聞き覚えのある、ふたつの声が辺り一面に響き渡ったのは。

びつくりして目を向ければそこには、息を切らせた藤宮 伊織と吉沢 まどかの姿があった。

ふたりはお互いに驚いた表情で互いを見て、なにやら言葉を交わしている。

なにしてるの、きみたちは？

「はあ、邪魔されちゃったね、新山。」

「桜川、あのな、俺っ。」

言葉を紡ぐようとして、唇に人差し指で封をされた。

「いいよ、今は何も言わないでも、ね☆」

「桜川…。」

一瞬、寂しそうに笑い、次の瞬間には普段どおりの無邪気な桜川さくらの表情に戻った。

「なーんかお絵描きも飽きちゃったなー☆他のクラスの男の子誘って遊びに行こーっ☆」

「おまえなあ…。」

んじゃね、と手を振り立ち去る桜川の背中を、俺は見送ることしか出来なかった。

「ちよ、藤宮さん、進めないってばあつ！」

「吉沢さんこそ、邪魔、しないでよねっ！」

吉沢と伊織は二人三脚のように組み合いながら、こちらへと向かってきている。

ほんと、なにしに來たのきみたち？

離れば良いじゃない、どうしてそんなにおバカなの？



「ふう。」

グループの子たちには遊びに行くと言え、ひとりで校舎に戻ってきた。

それなりに自信はあった、雰囲気も良い感じだったし、感触だつて悪くなかったと思う。

『ごめん、桜川、俺っ！』

でも、新山の心には響かなかった、のかもしれない。

押せばイケると思つてた、でもそれは甘い考えだつたみたい。

新山はやっぱり身持ちの堅い男の子みたいだ、キスを拒まれたのはシヨックだけど、それでもどこか少し安心した部分もある。

邪魔されてよかったかもしれない、あのままだったらきつと辛いて気持ちで胸が張り裂けてしまっていたかもしれない。

キスは拒まれた、だけど、フラれたわけじゃないから。

あたしは、いや、ウチは、狙った獲物は逃さない桜川 さくら。

はつきりと新山から断られない限り、まだウチにもチャンスはあるはず。

「負けないかね。」

藤宮 伊織、そして吉沢 まどか。

あのふたりには、絶対に負けてやるもんか。

バン、とウチは見上げた青空に向けて決意の銃弾を撃ち放った。

Re:12. 5 友と過ごす放課後

ある日の放課後、あたしは梨花と一緒に、学園から程近くに位置する駅前通りに来ていた。

停学を喰らう前の自分にとって放課後は部活動の時間帯だったから、こういうった友人と過ごす時間というのは新鮮で楽しい。

梨花との時間は何も考えなくていいし、馬鹿みたいな話をしながらの買い物や面白い食い、色々なことを忘れることが出来る貴重な時間。

「あ、これなんてレイナに似合うんじゃない？パンキッシュで格好いい感じでさー！」

「えー…、あたしこういうのは趣味じゃねえんだけどなあ。」

「良いから着てみてっつてほら！」

「わかったよ、着るだけだからな…。ったく。」

梨花から服を受け取り試着室へ向かう。

ちようど半開きのカーテンを開けて中に入ろうとしたときだった、隣の試着室のカーテンが開いて、中から誰かが出てきた。

「羽野…?」

「え、風見、先輩…?」

小柄で華奢な身体、パッチリとした目に小さな花びらのような唇、ふわふわな髪、可愛い容姿はまるで小動物のようで、彼女の周囲には目には見えない花畑が見える。

羽野 うさぎ、一学年下の二年生であたしが停学を喰らう前は、部活で一緒だった後輩。

「お久しぶりです、先輩。」

「お久しぶりです、じゃねえだろ。羽野、おまえ、部活はどうした？」

「あう、その、今は、おやすみしてまして…。」

「休み?…まさかまだあいつらに」

「ち、違いますよっ!先輩がその、言ってくれてからはそういうのはないので、大丈夫です。」

「そうか。ならどうしてこんなところにいるんだ?」

「今日はこの後、両親と約束がありまして、それで部活はおやすみをもらって、今は時間つぶしと言いますか…。」

「…そか、まあそういうことなら良いんだ、引き留めて済まなかったな。」

申し訳無さそうにしている羽野に背を向け、あたしは試着室に入ろうとした。

「あの、先輩。…先生、異動されて、今は、誰も先輩を悪く言う人はいません、ですから、その…。」

「羽野。」

「は、はいっ。」

「あたしはもう、あそこには戻れない。それはおまえが一番分かってるはずだろ?」

「で、でもっ」

「話はそれだけか?悪いけどツレを待たせてるんだ、おまえも貴重な休みなんだろ?よけいなことで時間を無駄にするのは勿体ないぞ、じゃあな。」

背を向けたまま、彼女の言葉を手で払うように拒絶し、無碍に扱う。

もうあたしには関係のないこと、たまたま懐かしい顔に会ったから声をかけてしまっただけで、気にすることではない。

俯き、震える姿、一瞬だけ見えた後輩の姿に不安が宿る。

それでも、自分には関係ない、自分は二度と彼女に関わってはいけないのだと言い聞かせ続けた。

暫しの後、試着室のカーテンを開ける。

羽野の姿はどこにもなく、代わりに微妙な表情を浮かべた友人が立っていた。

「さっきの後輩ちゃんだよね…？落ち込んだじゃってみたいけど…。なんかあったの？」

「何もない、ただ挨拶しただけだよ。」

本当は梨花も挨拶しただけではないとわかってるだろう、だけどそれ以上は追求してこない友人に心の中で感謝を述べ、詫びの意味も込めて試着した服を手会計へと向かった。



「おまたせ致しました、スペシャルチョコモランマキャラメルプリンパフェでございます、ごゆっくりどうぞ。」

「ありがとうございます、きたきた、やっぱりこれだよなあ。」

目の前に置かれたものに、俺は驚愕を隠せなかった。

パフェ用の容器に敷き詰められたフルーツとクリーム、そしてスコーンの上には我此処に在り、と主張するドデカイプリン。さらにダメ押しとばかりにプリンには生クリームの山が盛られ、その頂点にはチェリーが乗せられている。

彰人、おまえ、マジでこれを食べうのか…？

おまえほら、コンビニの肉まん好きだったじゃねえか、マ○クのダブルチーズバーガーが大好物だったろ？ジャンクこそ至高！とか言ってたじゃねえか!?まあある意味そのプリン山もジャンクだけだな。

だが、だがな……！友よ……！俺は、俺はおまえが甘味に酔う姿など見たくないっ……！見たくはないのだっ……！

「んまあ〜い♪もうさいつこうにうまいわあ♪」
「」

とろけてやがる。遅すぎたんだ。

っていうか何だよ此処!? やけにファンシーな内装なのはまだ良いよ!? でもさあ!?

「美味しいね〜♪」

「だよねだよね!? マジウマだよね!？」

「ってかこの前ママがねえ」

「え〜マジなんなんそれ〜ありえなくない?」

「ほっぺにクリームがついてるぞ、まったくだらしないやつめ…。」

「ぶ、部長っ／＼／＼」

男しかいねえ……！

待てよ、この世界ってほら男子は少ないはずだろ!?

なんで、どこから群れてきたんだこいつらは!?! めっさいるじやねえか雄どもが!

タイが曲がついていてよ、みたなノリでいちやついてんじやねえよ!

おっさんずラブなんて見たくないんじや俺は!

「どうした良、食わないのか? 美味しいぞ?」

「は、はは…。」

乾いた笑いが漏れる、だがせっかく彰人が奢ってくれたパフェだ、無下にするのも無礼というものだろう。

「っぐ……」

「どうだ、美味いだろう？」

なんと……！

圧倒的……！圧倒的なまでのっ……！

これは甘味の暴力……！

口内を支配する、濃厚な甘味はまさに侵略者の如く……！

目眩がする衝撃、脳内が馬鹿になりそうな濃い香り、舌の感覚を奪

う食感は暴力的なまるで濁流！

何を言ってるのかわからないだつて？

馬鹿野郎！俺だつて何を食わされてるのかも分からねえよ！

何なの!?何なのなのっ!?

しかし……！未だ、一口……！一口で、この衝撃……！

いや、もうこのノリは良いか。

「イケるだろう？もうさいつこうだよな♪」

「ああ……」

逝けそうだな。

これを全部食ったら確実に向こう側への距離が一気に縮まるような気がするわ。

うん、逝ける逝ける。

逝けるゾ～これ。

食うたびに失われる語弊力。

ああ～頭がぴよんぴよんするんじやあ～。

いや、頭びよんびよんしたらダメだろ、それドラッグの世界だろ。

なんとかスペシャルチョコモランマキヤラメルプリンパフェという暴虐的な甘味を完食した俺は、その後、彰人からの言葉すべてに「ああ

…。」としか返せなかった。

時々、「総員、戦闘準備。」とか口走って友人の頭上に大量の「？」が浮かんだりしたが何も問題は無い。

問題は無かった、良いね？

…あのパフエ、なんかやばいもんでも入ってたんじゃねえのか？

「良。」

「ああ…。」

「世の中には、知らないほうが良いことも、あるんだぜ？」

「ああ…。」

今日も順調に世界はどこかおかしく回り続けている。

はやいもので、俺がこちらの世界に来てから季節がひとつ過ぎ、俺の周囲の環境も当初とは少しだけ変化していた。

「だあ…やつと苦痛の時間が終わったあ…。」

四時限目が終わり、時刻は昼どきを示している。

同じ学生諸君ならわかってくれると思うが、この昼前の授業こそ一日で最も長いものであると思う。

空腹と退屈によってジリジリと嬲り殺しにされるような感覚の中、ましてやそれが自分にとって一番苦手な科目の授業中だとしたら？

寝れば良い？

馬鹿野郎！寝るとチョークが飛んでくるんだぞ！しかも確実に中に当たってくるんだぞ！

うちの数学教師はスナイパーかなにかかな？

兎にも角にも俺は退屈な授業を終えた、さあ今から楽しい時間が始まる。

「飯の時間だあああああつ！彰人、伊織、吉沢、行こうぜ！」

「おうさー、さて今日は何食うかなあ。」

「彰人はどうせメロンパンでしょ、それしか食べないくせにいつつも迷うんだから。」

「あたしは何にしようかな、ねえ新山は何にするの？」

変化その①、これまで三人一組で食ってた飯の時間が四人一組に変わった。

俺、彰人、伊織、そして吉沢まどかを加えた四人で机をくつつけて食べるようになった。

最初の頃は遠慮していた吉沢だが、最近はすっかり打ち解け、彰人とも伊織ともとても順調な友人関係を築いていると見ていて思う。

今の吉沢まどかを見て、誰もボツチだとは思わないだろう。だが少し気になることがある。

「伊織ってば、がつつき過ぎだよ。もう少しゆっくり食べないと喉詰めちゃうよ?」

「ほんなごぶおつ、うぐつ!」

「あくあ、言わんこつちやねえ、ほれ伊織、茶飲め。」

「くつ!あつつ!?あつついよ!?!これホツトじゃん!彰人!」

「冷え性なんだよなあ、俺。」

「彰人くんさつき、やべ、間違えた。とか言ってた気がするけど?」

「聞いてたのかよ吉沢。」

「あたし耳は良いんだよね。」

「…あたまは悪いけどね、ププツ。」

「伊織?今なんか言った?」

「ぶえつつにいく?なあにも言っていないよお?」

「その顔がムカついたっ!」

「ふみゆっ!はなをつまむなっ、こんにやろ!」

「…食事中だぞお前ら。」

「ごめんなさい。パパ。」

「だれがパパだ!」

「な、なあ吉沢?」

「ん、なあに新山?」

これだ、伊織のことも彰人のことも名前で呼んでいるのに、俺は未だに名字でしか呼ばれない。

いつか本人にも聞いてみたことがあるが、「なんか恥ずかしくて」と言っていたが。

吉沢にも吉沢にしか分からない事情があるだろうから、無理に名前と呼べとは言えないが。

それでもなんとなくこう、寂しいというか、疎外感というか…。

「な、なあ、ままま、まど、か。」

「ふうえっ!?!」

やきそばパンが宙を舞った。

「キャッチ!」

「ナイス伊織!」

「んまんま。」

「おまえが食うんかあい!」

「ににに、にいやまってば、どどど、どうしたの、き、きゆうにい!」
「いや、そのなんとなく、呼びたくなって…。」

時々こうやって俺から吉沢のことを名前で呼んでみれば、今のよう
に吉沢はテンパってしまう。

顔が真っ赤だ、もにゅもにゅとなにかを言っている、正直可愛い、撫
でくりまわしたい。

嫌がっていないのはわかる。

でも名前を呼ぶ度にこう、照れられてはなあ。いつかは慣れてくれ
るのかな?

ゆくゆくはお互いに名前で呼びあうような関係になりたいと、俺は
おもっているんだけど。

「まどか。」

「あう、その、り、りよ」

「あむっ!」

「ちよ伊織っ!?!」

俺と吉沢の間に割って入り、俺のツナサンドを貪り食う伊織、まるで餌に飛びつく子犬のようだ。

「おまつ!?それは俺の指だつーの!食うな!かじるな!」

「らふほふえふおふあふおうふお、ふあんふいふあ!」

「何喋ってるのかわっかんねえつーの!日本語喋れ!」

「…あ、あはは…。」

「あいでででつ!伊織、てめ、こんにやろ!」

「がるるるう!」

「いやあ平和だなあ。」

「そ、そーだねえー。」

「おまえら、和んでねえで助けろおつ!」

まあこれはこれで良いのかもしれない、俺達は誰が見ても友人関係で、こうやって馬鹿騒ぎが出来る関係を築けているのだから。



「あうっ!」

顔に投げつけられる、コロツケパン。

「ちよつと羽野さあ、あたしはカツサンド買ってきてつて頼んだんだけど、聞こえてなかった?」

「あの、売り切れちゃつてて…。」

「はあ!?なにそれ!?ったくパンもまともに買ってこれねえのかよ。」

「ほんとトロいよね、羽野つてさあ。」

「まあうさぎぢやんだからねえ、しょうがないって。」

校舎裏、昼食時には誰も寄り付かない薄暗がりのなかに、人影が四つ。

小さな身体を取り囲むように三人の女生徒が立ち、口々に下品な言葉を小さな彼女にぶつける。

「なにその顔？なんか文句でもあんの？あるなら言ってみなよっ?!
ええ、こらあっ!?!」

「っ！も、もんくなんて、ないよ…。」

「ミーナやめなよ、羽野が文句言うわけ無いじゃん、あたしらこうやって仲良くしてあげてるんだから。…ねえ羽野?」

「…うん。」

「むしろ感謝してほしいくらいだよねえ、部活で居場所がないあんたをあたしらが拾ってあげたんだからさあ。」

「そーそー、風見っていう味方がいなくなって、他の先輩から目えつけられそうになって、ほんと可哀想だったもんねえ。」

「先輩…。」

「ってか風見も馬鹿だよねえ、黒田が過剰に羽野に指導してたのも、レギュラーから外してたのも、他の奴らからの目があったからだったのに。」

「めっちゃ熱くなつてたよね、ウケたわ。」

「まさかあんな暴れるなんてねえ、愛されてたねえ羽野?」

「先輩は、馬鹿なんかじゃ、」

「あ?なんか言った?ねえ?今、なんか言ったよね?はつきり言えよ!聞こえねえんだよ!」

平手打ちを受け、羽野うさぎの左頬に赤い痕が浮かぶ。

「ミーナ、顔はやめなって。」

「っち、わかってるよ。立ちなよ羽野、…っふん先輩先輩って馬鹿じゃないのあんた?」

「あぐっ、」

ガシツと羽野うさぎの右腕を掴み、ギリギリと力が込められてゆく。

「いたっ、」

「あいつはもうあんたを助けてくれないんだよ?…わかる? わかってんかよ、なあ!?!」

羽野の腹部に拳がめり込む、一瞬彼女の息が止まるが、それでも彼女たちは羽野うさぎが倒れるのを許さない。

「ねえ羽野、あんたもあんたでさあ、ちよつとはやり返してきなよ? 女らしくない、そんなんだからこうやって、虐められちゃうんだよ?」

「わたし、は…。」

「聞こえないっつーのっ!」

「キヤハハッ、おっもしろっ、マジウケる!」

『ごめん、約束、破っちゃったね。ごめん羽野。』

誓ったから、約束したから、呟いた羽野うさぎの言葉は、誰の耳にも届かない。

酷く冷たい、鈍く重い音と乾いた音だけが、校舎裏の薄暗がりには響き続ける。

Re:14 友であるが故に

「元気そうだね、レイナ。」

「は、はは…、おまえもな、詩月。」

顔を合わせたくない、嫌なヤツに会ってしまった。

廊下で偶然にも出会ったこいつの名前は、沢北 詩月。(さわきたしづき)

物心つく頃からのご近所さんで、小さい頃はうちの道場で一緒に稽古した仲だった。

『わたしたち、しんゆうだよねっ！れーな！』

『うんっ！しずとあたしはしんゆうだ！』

『うさぎも、うさぎも！おねえちゃんたちとしんゆうになるのっ！』

『じゃあさんにんでしんゆうだ！』

あたしと、詩月と、羽野、三人で一緒に遊んで、三人一緒に喧嘩して、三人一緒に怒られて、三人一緒に泣いて…そんな幼少期をともに過ごした。

所謂、幼馴染の腐れ縁。

あたしと詩月は同学年で、小さな頃から友達で好敵手。

拳法の大会では二人で表彰台を競った、まああたしのほうが一位になることが多かったけどね。

真面目で基本に忠実な詩月は母さんのお気に入り、それに比べ破天荒で出鱈目なあたしは詩月を見習ってよく怒られてた。

何をするのも一緒、あたしたちは並び歩いて、羽野、いや、うさぎがそのあとをついてくるという関係がずっと続いていく。

あの時が訪れるまでは、そう思ってた。

「レイナ、黒田先生は鎖骨と肋骨の骨折、それに加え全身の打撲、生徒から暴力を受けたショックからか今後、他校に移られても競技指導者として歩むつもりはないそうだ。」

そうか、それは良かった。

「へえ、そりやけっこうなことじゃないか。」

「っ、おまえなあっ！」

詩月に胸ぐらを掴まれる、異様な空気を感じたのか周囲にギャラリーが増えてくる。

「…っ、不真面目で面倒臭がりな奴だけど、拳法には真摯な奴だと思ってたのに…まさか、師匠にならった拳を暴力に使うようなやつだったなんて。」

「母さんは関係ねえよ、あたしがあの女にムカついたからシメてやった、ただそれだけのことだ。」

「それだけ…？それだけだっ!?レイナ、おまえ、たったそれだけで、あの時にした誓いを、おまえは！師匠みたいになるって三人で」

「…ガキの頃のことだろう、覚えてるなんて真面目なおまえらしいな。」

「レイナっ、わたしはっ」

「いい加減離せよ、皆見てる。」

知ってるよ、詩月もうさぎも、あの時の約束を胸に頑張ってた、なんてことは。

ただ、その目指す約束の先に、あたしが行けなくなっただけのことだ。

そうこうしているうちに、教師がこちらに向かって駆け寄ってくるのが見えた。

停学が明けたばかりのあたしが、さすがに今回のような騒ぎを起こ

したとバレるのはまずい。

現場を押さえられる前に逃げるが吉だろうな。

「じゃあな、詩月。」

「待てっ！レyna！」

静止する詩月の声を無視して、あたしは全力疾走でその場から逃げる、僅かに振り返って覗き見た先では詩月が教師と応対している様子が見えた。



「沢北、風見とモメてるという報告を受けたが、一体どういうことだ？」

「なんでもありません、服装を注意して少し、口論になっただけです。」

「口論、か。本人同士で解決はしてるのか？」

「はい。」

「そうか、まあなんだ、風紀委員のおまえが風見を注意するのは構わな
いが、だが風見はだな…。」

「ご心配して頂き有難うございます、ですが彼女もまたこの学園の生徒
でするので、目の前での非行を見過ごすわけにはいきません。」

「そうか、だがな、まあその、ほどほどになっ？」

「はい、以後は騒ぎにならぬよう気をつけます。申し訳ありませんで
した。」

頭を下げ、立ち去る教師を見送ったあと、わたしは彼女が走り去った方向を見る。

当然ながらそこに彼女の姿は無い。

風見レイナ、わたしの幼馴染で親友だった女。

学園に入り、わたしはスカウトを受け、隣町の道場に通うことになって学園の拳法部で活動はしていなかったが、それでもレイナの活躍は当然ながら目にしてきた。

一年生でありながら個人戦で全国大会優勝、団体戦でも全国大会進出へと導く奮闘ぶり。

友として彼女の活躍は誇らしく、きつと幼い日の約束通りの未来がやってくると思っていた。

だが、あの日、わたしは信じられないものを見てしまった。

二年に進学して暫く経った頃、わたしは風紀委員室にて書類を整理していた。

そんな中、ひとりの生徒が部屋に飛び入ってきた、尋常ではない自体が起きているのは彼女の様子から見て取れた。

拳法部の生徒が教師と喧嘩になっている、一方的な状態であり、誰も彼女を止められない。

報を受けたわたしはざわつく胸を抑えながら現場に向かう、稽古場に入って見た光景は、決して見たくはなかったものだった。

『これは…どういうことだ、レイナ…？』

『詩月、なんだよ、来ちゃったのか。』

『詩月お姉ちゃん、違うのこれはっ！』

『先生、しつかり、おい誰か、救急車！急げ！』

『風見…。その…。』

『逃げねえよ。説明しなきゃならねえんだろ。』

『すまない。』

『部長のおまえが謝るなよ、めちやくちやにしたのはあたしだ。』

血を流して倒れていたのは拳法部の顧問の教師、そして血まみれで立っていた親友と、パニックになっている妹分、悲鳴と喧騒が支配した空間、あまりにも衝撃が大きい状況を見て、わたしは現実であると

は信じられなかった。

担架に乗せられ運ばれてゆく教師、そして教師たちに囲まれて稽古場を去ってゆく親友の姿。

わたしは教師の輪に割って入り、親友に掴みかかった。

酷く感情的な行動だった、冷静ではいられなかった。

だからこそ、口を突いて出た言葉は、選択を間違えたものだった。

『どういうことだレイナっ!?おまえが、おまえが黒田先生をやったのか!?おまえが暴力をふるったのか!?どうなんだ、こたえろレイナあっ!!』

目を見開く彼女の表情を見て、早まってしまったと思った。

あの時、わたしは彼女を信じて待つべきだった。

だが疑ってしまった、状況に流され、彼女にすべての責任があると思いきや、こんでしまった。

否定して欲しかった、開かれた口から紡がれるのは弁解の言葉であって欲しかった。

だが、聞こえてきたのは、その望みを打ち砕くものだった。

『ああ、そうだよ、あたしがやった。あたしが殴った。』

『…っ、そんなっ…。』

言葉が出なかった。

その後は、ただ見送ることしか出来なかった。

『詩月、お姉ちゃん、ごめ、ごめんなさいっ。』

『うさ、ぎぎ…っ。』

何もわからなかった、なぜレイナがあんなことをしたのか、なぜうさぎがわたしに縋り付き泣いているのか、なぜわたしはここに来たのか。

なぜ、こんなことになったのか。
わたしはただ、おまえの口から真実が聞きたかった。
あのときも、そして、今でも。

Re : 15 騒動の始まりはいつも突然で

体育の時間、それは学園生活で抱えたストレスを一気に開放し、身体を動かすことで発散することの出来る掛け替えのない時。

前の世界では体育の前の休み時間は着替えや移動に費やすもので、俺たち男子は教室で体操着やジャージに着替え、そして移動という流れだった。

だがこの世界では違う。

俺たち男子には男子更衣室なるものが用意され、女子は教室で着替える。

つまりだ、つい、うつかり、忘れ物しちやったりしたら、女子の着替えが見れちゃうということだよキミィ！

と、いうことだ。

俺は実にうつかり偶然にも偶々にも、体育館で履く体育館用のシューズを教室に忘れてきてしまったわけだが。

いやあ忘れてしまったものはしょうがないなあ、しょうがない。

取りに行かなくては。

「あ、いっけねー、俺、教室に忘れ物して来ちまったから、取りに行ってくるわー。」

俺は彰人とともに男子更衣室に辿り着いたタイミングで、考えていた通りの台詞を言って、教室へと向かうべく身を翻そうとした。

「ああ、シューズだろ？出る時に机にかけっぱだったから持ってきてやったぞ？」

「…っ！」

「なんだよ、その顔は。」

「いや、っ、な、んでもないぞっ！あ、ありがとうな！」

「お、おう。」

くっそ！このオカン男子めっ！
なんでこの子は気が利くのかしらっ！小憎たらしいっいたらありや
しない！



ところ移って此処は体育館。

「行ったよ、伊織！」

「ナイスだよ、まどか！そいやあっ！」

吉沢のトスが上がり、伊織のスパイクが決まった。

ジャージ越しでも揺れる吉沢のたわわな果实、良いね。

ご覧の通り女子達はバレーボールやら、バスケやら、集団競技して
たり、駄弁つてたりスマホをいじったり自由にしている娘らもいる。

女子は人数が多いからね、仕方ない。

吉沢も伊織も荷物を持ち込んでいるし、こういう自由なところはど
ちらの世界でも変わらないのかな。

それにしてもである。

女子達の服装を見て欲しい、なんということでしょう。

純白の上着に映える黒色のブルマ、そう、俺がいた前の世界では絶
滅危惧種となっていたブルマ姿である。

素晴らしいぞ、実に素晴らしいな、この世界はっ！

もう見慣れたはずなのに、何度見ても神様に拝みたくなるのは何故
だろうか？

もう、なんて言うんだろうか。

言葉にするならば…そう、ナイスブルマ！

え？俺たちは何してるのかって？

そりゃ、男子二人だよ？体育館だよ？することと言ったら決まってるだろう？

「そいつ！」

カコーン。

「なんのっ！」

カコーン。

卓球だよ、ちなみに審判はいません。

普段はお外で女子たちに混じって駆けっこだったり球技だったりするんだけどね、まあ今日は雨でさ。

偶然にも体育の先生が行事参加で不在、で自習になったってんで、体育館で自習になっているわけさ。

だからこんなフリーダムな体育の時間を過ごしているわけだ、ちなみに時々担任の先生が様子を見に来るから、皆形だけはキチンと参加している。

授業開始と終わり時に点呼を取られるからサボった奴はバレる危険性が高い、なかには抜け出した猛者もいたが…さすがに一時限程度の時間を抜け出してもなあ、って感じである。

せっかく体育館内で自由に遊んで良いってんだから、遊ばなくちや損だろう。

「ふっ、つい昨日、テニヌの王女様を読破した俺ならば、出来るはずだぜっ！喰らえ必殺ツイストサーブっ！」

カコッ

「ツイストでもなんでもねえ！」

カコッ

「ドライブβ！」

カッ

「ただのドロップショットじゃねえか、こんにやろ！」

ガスッ

「ちつ、ネットかよ…。」

「You still have lots more to work on…。」

「こんのやろ、越後リョーコ気取りかよ。もう一本だ良！もう一本やるぞー！」

「ほいほい、一本でも二本でもお相手しますよん。」

二人、ネット越しに構え直し、彰人がサーブを打とうとボールを上げたときだった。

「ちよ、羽野さん、大丈夫っ!？」

「脚痛いのっ？誰か、保険医の先生呼んできてっ！」

「あたしが行ってくるっ！」

「お願い、まどか…：うーちゃん大丈夫だからね、先生直ぐ来るから。」
そんな声が聞こえて来たのは。



女子達の騒ぎを聞きつけた俺たちもその中に入ってゆく。

そこには脚を押さえて蹲るクラスメートの羽野さん、そして彼女を囲むように心配そうな表情をした女子たちがいた。

「伊織、どうした？」

「彰人、良、その、うーちゃんが、着替えるときから気になってたんだけど、怪我してて…。」

「あの、うちらは止めておいたほうが良いって言ったんだけど、土井さんたちが…。」

「ちつ、羽野、何大げさに痛がつてんのさ、立ちなよ面倒くさい。」

「つてかさー、そんな言い方されるとあたしらが悪者みたいじゃん。心外なんですけど?」

「あのねえっ!前から言おうと思つてたけど!あんたらちよつとおかしいんじゃない!?拳法部で一緒だからか知らないけど、いつつもうーちゃん連れ回して!この怪我だつてあんたらが」

「い、伊織ちゃん、良いよ。わたしなら、大丈夫だから…。」

「でもっ!」

「あのさあ藤宮、あんたウザいんだよね?なにを勘違いしてんだか知らないけど、羽野の怪我はたまたま部活で痣になっただけで、こいつは大げさにしてるだけだつて。ねえ?」

「そーそー、こいつトロいから、よく受けミスするんだよねー。」

これは、まずいな。

伊織のやつは本気で怒つてるし、土井さんと加納さんは拳法部で気が荒い、もしも喧嘩になつたりすれば伊織が危ない。

「まあまあ土井さんも加納さんも落ち着いてよ、急に羽野さんが倒れたもんだからさ、伊織も気が動転してるから、ああいうふうと言っ

ちやっただけで、本心から言ったわけじゃないと思うんだ。」

「葛城は黙っててよ、っていうかあんたは藤宮と仲が良いからあいつのこと庇ってんでしょ？そこどいてくんない？」

合わせろ、という彰人の視線に気づいた俺はすかさず、伊織の前に立ち彼女たちから引き離すように動いた。

「伊織も言い過ぎだっつーの、ちよつとは相手を見てものを言えよな。」

「でも、良っ！」

「わかってるっつの、羽野さんを守りたいなら此処は耐えろ。」

「っつー！」

『ちっ、羽野、何大げさに痛がつてんのさ、立ちなよ面倒くさい。』

正直、俺もあの一言を聞いたときは相手が女の子とはいえ、思わず怒鳴りつけそうになってしまった。

なんとかこらえたが、それでも土井さんと加納さんの羽野さんに対する態度は許せるものではないと思う。

彰人が止めてはいるが、加納さんはともかく土井さんの怒りは収まりそうには見えない。

俺はポケットからスマホを取り出し、保険医を呼びに行った吉沢にメッセージを送る。

今日が自習で良かった、普段なら更衣室に置いてきてたはずだから。

あいつの脚なら一階の保健室から三階に行ったとしても、そこまで時間は掛からない筈だ。

心配そうに見つめるクラスメートたちになんでもないふうには笑顔を振りまきながら、吉沢達の到着を待つ。

保険医の先生が来たところできつと事態は好転しない、騒ぎが後になるだけだ。

この険悪な状況を治められるとすれば、俺が知る限り学園にはあの人しかない。

頼むぞ、吉沢…！

「お前たち、何を騒いでいる！」

祈りが届いたのか、そこには吉沢と保険医の先生、そして俺が望んだとおりの人物が立っていた。